

---

# MONSTER S ~モンスターズ~

RAI

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MONSTERS〜モンスターズ〜

### 【Nコード】

N5312R

### 【作者名】

RAI

### 【あらすじ】

どこかの世界いつかの時間、出合うはずのない彼と彼女が出会った。

異世界に召喚された三十路手前の日本人男性、遠野 光秀は、目の前に現れた巨大で恐ろしい、しかし、白銀に輝く美しいドラゴンに選択を迫られる。

「私の下僕になるか、さもなければ魂まで凍てつく氷像になるか、

お前に選ばせてやるじ。」

そして二本の糸は、新たな英雄伝説を紡いでゆく・・・

## 第1話 氷の女王

迫り来る人間達の足音に、私はガラにもなく齒噛みし口角を歪み上げる。

元はと言えばあの、交尾の事しか頭のない低能な雄火竜のせいだ。繁殖期になると必ず、私の家まで来て交尾を強要する。

冗談ではない！！あのような言葉も解せぬ、ただ図体がデカイだけの竜と、なぜ、この高貴で美しい私が交わらなければいけないのだ！！考えたただけでおぞましい！！

だから私は繁殖期前になると、別荘の方へ一時的に移動する。

いくつもの魔法術式を組んでいる家の中であやつを撃退する事は容易い……

が、自慢の家を破壊されたり、あやつ汚らしい血で穢れたりする事だけは避けたい。

だから今回も別荘へと移動した。そうしたら、どうやって知ったか、別荘の方に先回りされていた。

悔しいが、単純な力勝負となると分が悪くなる。魔法術式もまともに組めない空中で、何とかあやつを撒く事ができたのが不幸中の幸いか……。

しかし、翼の骨を折られ、満身創痍で辛々たどり着いた名も知ら

ぬ山は、どうやら人間どもの縄張りだったらしく、次から次に冒険者と呼ばれる低脳で野蛮な、まるであの雄火竜の様な輩が私の所へやってくる。

もちろん、氷漬けにしてやるのだが、ただでさえ同属にやられた傷は治りが遅いというのに、人間の相手などしてられない。

かと言って移動できるワケでもなく、もたもたしている間に、どうやら人間達は群れを成して攻めてきたらしい。

「お前ら心してかれよ！！相手はアーテスタ山脈に住んでいた、かの有名なドラゴン『氷の女王』だ！！ヤツのブレスを浴びれば骨の芯まで氷漬けにされる、先行隊は慎重に、しかし確実に巢穴の奥までドラゴンを追い詰める！！魔術師団は防御結界を展開しつつドラゴンの術式を解除、第二術師団は先行隊撤退と同時に巢穴の奥で『古の獣』を召喚だ、あわよくばドラゴンと同士討ち、どちらか生き残ったとしても瀕死は間違いない、追い討ちをかけ討伐だ！！先行隊はできるだけ粘れ！！第二術師団は迅速に召喚術式を組上げる！！そこが勝負のカギとなる！！以上だ、それでは配置に付け！！」

人間どもの怒声が聞こえてくる、奴等はどうやら『古の獣』を使うらしい。

原始的で暴れるだけしか能のない滅びた種族など本来なら敵ではないが、今は少々厄介だ、呼び出される前にかたをつけるでしょう。

人間どもが入って来る前にこちらから奇襲をかける。

暗くて一寸先さえ見えない洞窟内からブレスを吐くと、先頭にいた

鎧で身を固めた奴らの半数を氷漬けにする事ができたが、残りは魔術師が張ったのだらう結界により逃げ延びたようだ。

中々に反応が早い、奇襲にも混乱せずに素早く隊列を組み直すと、後ろでは召喚術式を組み始めている。それどころか、私の防御結界の解除まで始めている。

臨機応変に行動できる戦いなれた精鋭部隊といったところか、早く潰してしまわないとこれはかなり手強い敵だが……いいだろう、格の違いを思い知らせてやろう!!

「隊長!! ヤツの結界が強固になりました!! 解除どころか、こちらの結界の方が削られてます!! 1匹で結界を張りながらこちらの結界を解き、なおさらブレスまで吐いて攻撃してくる、見たままなんで言いたくありませんが、ヤツは化物です!!」

「魔術師団はできるだけ派手な攻撃魔法でヤツの気を散らせる!! 第二師団は召喚術急げ!! 先行隊は……クソッ!! 全滅か!! 結界はどの位持つ?」

「持つて30秒ほどです」

「1分持たせる!! 召喚の方は?」

「3分ほどいただけ」

「バカを言うな!! 55秒でやれ!!」

人間どもの張った結界の中から一人の男が飛び出してきた。コイツは指揮官だ、己が身の丈ほどあるう大剣を担いでいながらも、素早く私の足元へ潜り込むと、その剣を振るう。が、硬い鱗と結界に守られた私の身体には傷一つつけられない、尻尾で払うと剣でガードしながらも吹き飛ばされる。と、視界を爆発が覆う、ダメージはないが音と光が邪魔で気が削がれる。

「ゴミムシの分際でやってくれる！！いいだろう、貴殿らの無駄な努力に免じて少しばかり本気を出してやろう！！」

「しゃ……喋った……」

「いかん！！結界に集中しろ！！」

全てが静止する白き世界を呼ぼう

静かに凍てつく世界を呼ぼう

ルリ……

キルリキルリ・キルリキ

とたんに世界は白く、そして静寂が支配する。

一瞬で魂まで凍てつかせたのだ、己がいつ死んだのかすら分かるま

い、私の後ろに飛ばされた指揮官以外は。

「カツカツカツカ・・・コレが私と、お前らゴミムシとの力の差だ、去れ、お前は絶望を伝えよ。」

予想以上に魔力を消耗してしまった。しかし、それでも私に挑もうと思うほど愚かではないだろう。

「・・・それはできねえな。」

「分からぬな、もはやお前に手は残されていまい？」

「部下を皆殺しにされて、俺だけおめおめと逃げ帰るワケにはいかねえんだよ・・・それに」

魔方陣が光り出す、凍てつき歪んだ魔方陣が作動するとは・・・

「はは！！まだ手は残されているんでゲツ！！」

鳴き声が癪に障ったので尻尾で叩き潰す。ゴミムシの汚らわしい体液が付着してしまった。

複雑に組み込まれた術式が光を纏い、空間に穴を開ける。

あれは次元や時空を超えて作動する高度な術式だ、人間ごときが扱える代物ではないハズなのだが、現に目の前で『何か』が呼び出さ



れ形を成してゆく。

しかしソレは古の獣ではない、小さく、まるで人間の様な・・・いや、人間だ。

黒い髪、黒い瞳、そして黒い衣を纏っている。

人間の亜種だろうか？見た事のない色素ではあるが、たしかにソレは人間だ。

「ッ・・・何だ？何が起きた？」

聞いた事のない言語

どこかの世界のいつかの時間

偶然呼び出された人間は

白い世界で不自然なほど黒く浮いた存在だった・・・

## 第1話 氷の女王（後書き）

小説を書く事に不慣れな初心者ですので、誤字脱字、おかしい文法、ご意見ご感想ございましたら、遠慮なく書き込んで下さいまし。

そうしていただけると、助かる&やる気が出ます^^

初心者なりに頑張りますので、よろしければお付き合下さいまし。

よろしくお願いします。

## 第2話 新たなる物語

遠く古の時代から語り継がれるEDDA

標となるSAGA

あらゆる伝説の、あらゆる竜は、あらゆる英雄に倒されて

それが運命だと

それが宿命だと・・・

どこかの世界のいつかの時間

英雄に倒される運命の竜がいた。

同属に穢された翼は腐って朽ちて

白銀の美しい鱗は黒くくすみ

臭気を放ち

毒を撒き散らし

呪いを吐き

そして英雄に屠られる。

それが彼女の宿命だった・・・

どこかの世界のいつかの時間

英雄伝説が嫌いな少年がいた。

なぜ竜がいつも倒されるのか

なぜ倒す事でしか解決できないのか納得できないまま

やがて少年は大人になり

幻想を捨て、夢を忘れた

しかし運命は狂った。

それは彼の宿命ではなかった・・・

「ッ・・・何だ？何が起きた？」

ああ、分かっているさ、マヌケなセリフを吐いてる事は十分分かってる。

だが、他に何と言ったらいいんだ？

バリッとスーツに身を包み、今日も会社勤めご苦労さんと出勤中  
たんだ俺は・・・

まあ、ただの派遣だけだよ？  
でも、それなりに頑張ってたんだぜ？  
たまにサボタージユ  
するけどな。

それなのに、なぜ俺はこんな寒々とした森の中にいるんだ？と、今  
自分に起こった現象を頭の中で整理してみる。

駅の改札出たとたんだった、軽い眩暈と視界を塞ぐ白い光、どこ  
かに落下してくような浮遊感、そして、シブいオッサンの声で、ど

こが異国の言葉が頭の中に流れ込んできた。  
初めて聞く言葉だが、なんとなく意味は理解できた。まるで脳ミソに直接語りかけられてるような不思議な感覚

「汝、私の呼びかけに答えし者よ、私の剣となり災いを退け、私の盾となり災いから守りたまえ」

もちろん嫌だ。

ってか、呼びかけに答えた覚えはないし、得体の知れない事には関わらない方がいいし、厄介ことはゴメンだし、剣とか盾になれって、使い捨ての身代わりっぽいのも気に食わない・・・

だがしかし、そんな俺の意志などまったく尊重されていないから、こんな場所にいるのだろう。

つまり、アレだな。

ゲームや漫画とかでよくある“異世界召喚”ってヤツだな。

足の下で薄らと光っている奇妙な魔方陣。

その魔方阵を困う、灰色のローブを纏った怪しい集団。

俺を召喚したであろう、この者達がカチコチの氷漬けにされている事を除けば、よくあるファンタジーの冒頭部分だ。

これで「魔王を倒して下さい勇者様」とくれば完璧だ。

いや、ホントか？いくらなんでも、あまりに突拍子もない事だ・

俺は遠野<sup>とおの</sup>光秀<sup>みつひで</sup>29歳、格闘技や剣術を習ってるわけでも、ましてや特殊な能力を持っているわけでもない、冴えない三十路間近のフリーターだ。

ゲームや漫画で俺に最も適している役は・・・モブだ、または村人、つまり、こんな事態になる事自体がありえない！！そんなキヤラではないのだ！！

まあいい、とりあえずだ、とりあえずは保留だ。

それよりも、この寒さをどうにかしたい、秋口の過ごしやすい気温から一変して真冬の森とありえない。それと、ココにいるのは得策ではない、凍りついた人間の氷像が立ち並ぶこの光景は異常すぎる・・・。

よし、そうと決まれば、一秒でも早く、ここから移動した方がいい。

この、申し訳程度の山道を下って行こう、氷像と化した者達の登ってきたのだろう足跡を追跡すれば、街にでも出られるかも知れない。

「よし、よし、やれる事からやる。パズルと一緒にだ、端っこや分かりやすい絵柄から手をつけていくのがセオリーだ。」

自分に言い聞かせるように呟くと、氷像をすり抜けるように足を一歩前進させた。

そして、立ち去ろうとする俺に彼女が声をかけたのが始まり。

背骨から脳髓までズゾゾゾと、駆け上がっていくような蠱惑的な、それでいて気高い王、いや、女王のような威厳と自信に満ち溢れている、そんな声が頭の中に響いた。

分かるはずの無い異国の言葉

しかし、言葉とは別に流れ込んでくる伝えたい意志。

そう、駅の改札口から、ここに来る時、頭の中に響いた声の様に、伝えたい事はなんとなく伝わってくる。



『その者よ、お前は何者だ?』

どこかの世界のいつかの時間

起こるはずのない事が起き

出会うはずのない彼と彼女が出会った。

それがこの世界に

これからの歴史に

新たな物語を

新たな英雄伝説を紡ぐ

一本の糸となる。

MONSTERS

## 第2話 新たなる物語（後書き）

すいません、1話からずいぶん間が空いてしまいました；

これからはこまめにアップしていけるようにガンバリマス！！

### 第3話 マナと理

マナは、世界を満たすエネルギーだ。

多い少ないはあるが、動物、植物、鳥、水、風、矮小な蟲にも、無造作に転がっている石にさえ、ありとあらゆるものにマナが宿っている。

世界がマナできていると唱える人間もいる位だ、まあ、無能な人間どもならそう思っても仕方ないだろうと思えるほどに、ありとあらゆるものにマナは宿っている。

そして私は、マナの保有量、質、扱い、どれもが特質して秀でたハイドラゴンだ。

そのハイドラゴンである私にかかれば、初めて遭遇した相手だろうと、そいつに宿っているマナを、私のマナで触れるだけでいいのだ。

それだけで、どれ位魔法が使えるのか、どのような属性なのか、耐性、弱点、気質、持病、家族構成、感情など、様々な情報を読み取る事ができる。

それは、たとえ神や魔王であろうと決して真似することのできない、悠久に流れる時の中で私が独自に編み出した固有能力であり、触れられたら最後、その者の秘密はなくなる。

そのハズなのに、おかしい……

なぜだ？

この人間からは、まったくマナを感じられない。

ありえない……

私に挑んだ、とある魔術師がそうであったように、マナが切れれば、その生命体は例外なく死ぬ。

それは魂が、意志を持ったマナの塊だからだ。

つまり、この人間らしきモノは魂を持っていない事になる……

いや、人間なのか？

だからと言って、ゴーレムやホムンクルスでもないだろう、マナ

が宿っていない魔法生物など、根本から破綻している。

では、今、私の目の前で、氷像を観察したり、ブツブツ呟きながら同じ場所をグルグル周ったり、奇妙な行動を繰り返している“コレ”は何なのだろうか・・・

語りかけ、直接問いただせばいいのかも知れないが、先程からこの人間らしき形状のモノがブツブツと呟いている言葉は、竜語、古代語、神語、獣語、人語、他にもありとあらゆる言語を知っている私ですら聞いた事のない言語だ、言葉の疎通は難しいだろう。

ならば、意志を魂に直接伝えるしかない。が、魂がない・・・理論上それも不可能だ。

仮に可能だとしても、こんな得体の知れないモノと魂を繋ぐのは避けたい、魂を奪われる恐れもある・・・何が起ころしてもおかしくない。

が・・・

がだ・・・

それでも知りたい。

こんなにも奇妙で、まったく想像もできない、知的好奇心を刺激されるモノは初めてだ。

ああ・・・何なんだ？オマエは何なのだ？人間か？ホロウやレイス、アンデッドの類か？

ああ・・・ダメだ・・・マナを宿してないというだけで、すべての可能性が否定される。

この感情は、多分、歓喜だ。

気が遠くなるほど長い空虚な時間、得る知識を失いつつある絶望、つねに微睡まじろみの中で過ごしてるような感覚。

しかしだ、目の前の存在は、私の知っている理こと全てを覆しかねない存在なのだ。

停滞、飽和状態となっていた新しい知識が、世界を超えて私に会いに来てくれただなんて、らしくもなく浮かれてしまう。

無くして久しい知識への好奇心、欲求がコポリコポリと湧き上がってくる。

もう、いても立つてもいられないなんてな・・・はは！

『おい、その者よ・・・お前は何なのだ？』

魂を繋いだ事により、目の前の“ソレ”から、感情や思考が流れ込んでくる。

どうやら魂はあるらしいが、マナとは別の形態で存在しているみたいだ。

しかし、あまりに弱く儂い存在だ・・・

「女性の声？」「うおあああ！ドラゴン！？」「怖い」「食われるのか？」「なんでドラゴンが？」「語りかけてきたのはコイツか？」「氷漬けのヤツらはコイツが？」「ここはガチでファンタジーな世界か？」「なんで？」「会社に行くはずだったのに」「どうしよう」「落ち着け」「クールだ」「平常心だ」「死ぬ時は死ぬ」「腹を括れ」「観察しろ」「10m位ありそうだな」「白銀の身体」「金色の瞳」「巨大な翼」「長い尻尾」

「.....」



「あれ・・・俺、おかしくなったかな？」

「こんな時に、食われるかも知れないのに、なんで俺は・・・」

「・・・美しいなんて思ってたんだろ」

自身のマナをまったく有してないためか、“ソレ”の感情や思考は阻害される事なく、クリアに伝わってきた。

驚愕、恐怖、混乱、乱れに乱れた感情はほんの数秒で収まり、冷静に今起きた事象と向き合う感情のコントロールには目を見張るものがある。

そしてその結果、“ソレ”は私に見惚れてしまったらしい・・・

美しい私も罪づくりだが・・・まさか、こんなにも矮小な存在が私の美しさを理解するとは・・・

やはり、普通の人間よりは高度な存在なのかも知れん、大した審美

眼だ。

うむ、やはり面白い……

面白いぞ……ははは……

『お前は私のものだ……』

「へあ？」

ずいぶんとマヌケな声を上げる……が無理もないだろう。

『私の下僕になるか、さもなければ魂まで凍てつく氷像になるか、お前に選ばせてやろう。』

はは……みっともないほど浮かれてるな私は。

中はどうであれ、矮小で下級で低俗な人間と同じ外見を持つ者と  
契約しようと言っただから・・・

### 第3話 マナと理（後書き）

これからは、1日1話を目標にできたらいいな〜なんて・・・

誤字脱字、不適切な表現、感想、意見など、くれたら嬉しいです^

^

## 第4話 契約

『私の下僕になるか、さもなければ魂まで凍てつく氷像になるか、お前に選ばせてやろう。』

白銀のドラゴンは、俺を見下ろしながら、ゆっくりと告げた。

まるで、呪いでもかけるかのように・・・

うん、これ選択肢ないよな？

逃げれそうにないし、だからと言って氷漬けはカンベンしてほしいモンだ。

つまりは下僕ライフ一択ってワケだが、まあ、未知の世界で独り彷徨うよりも、強者の庇護の下、現状把握及び帰る手立ての模索をした方が安全だろう・・・。

「二つ、聞いてもいいか？」

本当は聞きたいことが山とあるが、答えてくれるとしたら多分、この程度が限界だ・・・そんな気がした。

『ふふ・・・賢い奴よ。いいだろう、申してみよ』





『察しがいいな、その通りだ』

「ええええええええええ!!」

何かトンデモない事に巻き込まれたと、今更ながら愕然とする。

『さて、そろそろ答えをき』

「なるよ、下僕でも奴隷でも好きにしたらいい」

そう、始めから答えは決まってる。

このドラゴンは冷徹なところはあがるが、悪いヤツではない気がする・・・  
・とりあえず、体中に傷や深刻そうなダメージを負っているにも関わらず、質問に丁寧に答えてくれる余裕と、器のデカさを感じた。  
あと、声の色っぽくて好きだし、このドラゴンが俺をこんな事態に巻き込んだ張本人ではないというのもデカいな。

だが、一番の理由は・・・俺はまだ死にたくない。

まあ、悪いようにはされない・・・と、思いたい。



そんな俺を興味深げに見つめていたドラゴンは、静かに、しかしやらしく口角を上げる。

『そうか、ならば契約だ。』

と、ドラゴンの前に複雑な記号を幾重にも組み合わせ、絡ませたような、ケルト模様にした魔方陣が浮かぶ。

『汝、我に忠誠を、我と共にあり、我とともに死に、我に全てを捧げる事を誓え』

まるで結婚式の誓いのようだ・・・そう考えると、結婚式の誓いは、一種の呪いみたいなものなのかも知れないな。

「・・・・・・・・・・・・・・・・誓います。」

すると、激しく光り出す魔方陣にドラゴンが手（前足？）を当てる

『では、魔方陣に触れよ』

まるで、ガラス越しに手を触れ合う恋人同士のようなようだ、なんて口マンチックな事を思う自分に寒気を感じながら、恐る恐る魔方陣に手を触れた。

と、魔方陣が絡み合った二匹の蛇の様に解け、ドラゴンと俺、互いの腕をスルスルと伝って登って来る。

そして胸の辺りまで来ると、不意に、水月に激しく鋭い痛みが走る

「ウグッ……アアアツッ!!」

『………ツク……』

激痛にうずくまる俺を見下ろしながら、ドラゴンは告げる。

『契約完了だ……これからは、私のために生き、私のために死

ね。』

ドラゴンの声が遠くなっていくのを感じながら、俺は迫り来る間に、意識を委ねた。

## 第4話 契約（後書き）

ちよいと遅くなりましたが、4話です!!

お気に入り登録してくれたみなさま、ありがとうございます！

本当にうれしいです、これからもよろしくお願いします^^

## 第5話 氷解

あれから10日が過ぎた。

ドラゴンの下僕となった俺は、邪魔な人間をジェノサイドしまくったり、近隣の村や街を襲ったり、世界征服に向けての布石を置いたり……

なぐんて事はまったくなく、ドラゴンの世話と巣穴から街への往復が、俺の主な仕事内容となっていた。

どうやらこのドラゴン、同属であるファイアドラゴンに手痛くやられたらしく、辛くも逃げ込んだこの洞窟で傷の回復を図ろうとしていたらしい……が

ハンターやら冒険者やら騎士団やらと、次々と襲い来る人間達により、体力的にも、マナと呼ばれる魔力的にも限界に達しており、ちよつと召喚された俺を小間使いにし、現状の改善を試みた……と。

まあ、そんなこんなで、俺は今日も街に買出しに行くために山を降りる。

何を買出しに行くかと言うと、家畜だ。まあ、早い話ドラゴンの餌を買いに行くのだ。

近くの街に農畜産の大きな市場があり、あのドラゴンの好物であるホグールドと呼ばれる、鹿を太らせたカンジの家畜を買いに往復5時間。

お金は、怪我をして抜け落ちてしまったドラゴンの鱗や甲殻を冒険者ギルドとやらに持ち込んだところ、大金で買い取ってくれた。なんでも、上質なドラゴンの素材は金よりも高価らしく、ホグールドを100頭近く買えるほどの資金を手に入れ、スーツを汚したくないのもあり、自分の装備一式しれっと買い揃えたりしたのだが、黙認してくれてるっぽい・・・なかなか太っ腹だ。

そうそう、あと契約した事により色々と変化が起きた・・・俺の身体に。

まず、胸の少し下、水月のあたりに魔方陣のような文様が浮かんでいた。

なんでも、それがドラゴンと契約した証らしい・・・これで日本に帰っても温泉に入れなくなった。

それと、身体能力が上がった。

悪かった視力もマサイ族並によくってるし、聴力もよくなったと

思う。が、何よりも身体が軽くなった、垂直で軽く3mほどジャンプできるし、走っても原付で飛ばしてる位のスピードを出せる。今だったら、オリンピックで金メダル取れるかもしれない・・・まあ、次の日筋肉痛で苦しんだが。

あと、ドラゴンから知識をダウンロード及びインストールができるようになった・・・のだが、これはもうカンベンしてほしい。

竜語、古代語、神語、獣語、人語、一通り必要らしい言語をドラゴンからダウンロード及びインストールした時の事だ、あまりの情報量に激しい眩暈を起こし、鼻血を垂らしながら気絶した。

これ以上やると、いつか脳みそが破裂する・・・比喻ではなくマジで。

最後に、マナと呼ばれる力を得た。

これは、この世界を司るエネルギーで、この世界のもの全てに宿っているらしい。

だが、この世界の住人でない俺はマナというものをまったく宿しておらず、ドラゴン曰く、真っ白な雪原のようだったらしいが、契約により、ドラゴンの力を少なからず宿した俺は、ドラゴンのマナを体内に吸収、魔法が使えるようになった・・・らしい(使い方が分からない)

まあ、それらのおかげで、言葉には困らないし、強いマナとやらを発しているらしい俺を襲おうとする輩も少ない。たまにいますが、余裕で逃げ切れる。

次にドラゴンの世話の方だが、毎日身体を磨いてやり、傷口に薬を塗る。なんでも、同属にやられた傷は治りが遅いらしい。

これはドラゴンにしくなくてもよいと拒否されたが、傷口を放置して悪化したんじゃ、俺が迷惑を被る。

なぜなら、このドラゴンが死ぬと、俺も道連れにされるからだ・・・契約とは恐ろしいもんだな。

「やるなと言われようがやる、俺の命もかかってるんだ、大人しく塗られてろ。」

そう言うと、驚いたように目を見開き俺を見ていたが『命令に従わないとはな！それでは契約した意味がないではないか！』と、なぜか爆笑していた。

あと、糞の始末だ、これが一番堪える・・・なんせ、1日2頭もホググールドを平らげるのだ、糞のデカさも洒落にならん。

しかし、放置しとくと悪臭を放つ、ドラゴンは回復のためになるだけ身体を動かしたくないらしいので、やはり俺が始末するしかないのだ・・・。

それが終わると、川に身体を洗いに行く、真冬かと思っていたが、実は春先だったらしく、召喚された時の、あの凍てつくような寒さの森は、ドラゴンプレスによるものだったと言うのだから、その威



力には舌を巻く。

何はともあれ、真冬の行水にならなかった事には感謝したい。

買出し 身体磨き、傷の手当て 巢の掃除、糞の始末 行水

とまあ、これが俺の最近の生活リズムになりつつある。

ああ、それと、寝る前に色々と言いた世界の話ドラゴンに聞かせている。

『お前のいた世界の事が知りたい。記憶を私に見せよ……余すことなく。』

なんて言われて、全力で拒否したのだ。

「そんな生き恥さらす位なら死んだ方がマシだ！！」と

そしたら爆笑された後『ではお前が語れ、異界の話……』と、  
そういう流れになった。

ドラゴンが喜ぶのは科学の分野だった。

雨が降るメカニズムや雷、台風、ハリケーンなどの気象についてや、ナノやマイクロ、目に見えぬ小さな世界から、恒星や惑星、ブラックホールに宇宙の誕生、ビックバンから永遠と広がり続ける広大な宇宙の話など、俺が知る範囲の科学を話し、質問され、答え、考え、聞いて、また二人で考える。

「で、物質を構成する原子や分子の熱による震動が完全に静止する温度、それが絶対零度と言われていて、まあ、理論的には不可能だと言われてる……多分、だったと思う。」

『なるほど、それを認識、意識しつつマナを組上げれば、さらなる高みへと……』

「いやいや、洒落にならないからな？周囲への影響もちゃんと考えるよ？多分大変な事になるぞ？」

『私を誰だと思っている？お前に言われるまでもない……しかし、原子や分子とは何だ？どのように物質を構成しているのだ？』

「ゴメン、もうこの辺から分からね〜わ」

『おい貴様、ここからが一番大切なところであろう！？なぜ知らないのだ！？知りたいとは思わないのか！？物質を構成しているメカニズムなのだぞ！？』

「いや〜んな事言われてもね〜あ！たしか原子は、原子核っていうのと電子っていうので構成されてるとか何とか……」

『原子核、電子……また新たな“子”が出てきたな！！電子とはなんだ？』

「宇宙を構成する素粒子の一つだ！！」

『ほう！！宇宙を構成するとな！……また新たな“子”が

出てきたな・・・」

「ごめん・・・マジでもう分かりません・・・」

『なんだと！？おい、ふざけるな！！なぜ知らないのだ！？』

「いや、俺勉強ニガテだったからな。まあ、これでも割と科学好きだったんだけど・・・」

『世界を、いや宇宙を解き明かす鍵が目の前にあるというのに・・・なぜ知りたいと思わないのだ！？』

「いや、なんでだろうね。知らなくとも生きていけるからかな。~~~~」

『~~~~~~~~ツ！！！！貴様はツ！！！！私の下僕なのだぞ！！！！』

「いや、意味わかんイテテテテテ！！ぎゃああああ！！ギブギブ！！潰れるから！！出ちゃっ出ちゃっ内臓出ちゃっ！！」

機嫌を損ねると、前足で潰されそうになる。

しかし、その頃にはすでに、このドラゴンに対して情が移ってい

た。

傷が酷く、壊死してしまった左翼を噛み千切る事となった時には、必死に止血と手当てをしたし『もう飛べぬのだな』と千切れた翼を悲しげに見つめるドラゴンにウルつときてしまい『なぜ光秀が泣いているのだ？』と笑われたりもした。

これも契約の力だとすれば、それは本当に恐ろしいと思えるほど。。。

1ヶ月が過ぎた。

傷もほとんど癒え、ドラゴン、ことレステア（竜語で吹雪という意味）は山中を散歩したり、時には動物を狩ってくるほど回復していた。

俺的には、糞の処理をしなくてもよくなった事が一番うれしい。

それと、山にも変化があった。

レステアが回復するのに比例して、細い木々が巨木になり、まるでジャングルのように生い茂った大山へと生まれ変わった。

なんでも、ドラゴンに集まる豊富なマナをエネルギーとして育ったらしいが、1ヶ月でこの変わり様は異常である。

そして、それに伴い、モンスターと呼ばれるような猛獣奇獣を見かけるようになった。

最初、二足歩行で立って歩くトカゲを見た時には腰を抜かしそうになったが、そのトカゲは俺を見ると、まるで神でも崇めるような姿勢をとった。

どうやら、この山はすでにレステアの縄張りとなったらしく、その縄張りに住むモンスターはレステアに服従を誓うのだと言う。特に、ドラゴンを神のように信仰しているリザードマンならば、レステアとまったく同じマナを持つ俺が拝まれるのも、なんら不思議はないと。

そしてその日も、いつものように街で家畜を買い、洞窟に戻った。

「ただいま~~~~と、なんか王国騎士団がまたドラゴン討伐隊の求人出してたぞ？ だいぶ良くなったとは言え、まだまだ病み上がりなんだから気を付けないとなつと・・・」

.....

「あれ？レステア？また散歩にでも行ったか？」

しんと静まる洞窟に違和感を覚え、奥に入る。

深さはそこまですぐ、そろそろ改築したいなとレステアがぼやいてたのを思い出す。

そう言えば、ちゃんとした家にしたいとも言ってたな・・・

と、奥にレステアが丸まった姿でじっとしているのが見えた。

「なんだ、いたのか・・・メシ、買ってきたぞ？」

.....

動かない、胸騒ぎがする。

「おい、レステア？どうした？傷でも痛むのか？」

すごく動揺してるのが自分でも分かる、自分の鼓動が五月蠅い。

「おい!!」

「ふふ、動揺しすぎだな」

「!!」

後ろから聞こえた声に、慌てて剣を抜く

振り向きざまに横に薙ぐが、それは親指と人差し指、それと中指の3本指で止められた・・・

銀色の髪、金色の瞳、人形のように整った顔立ちの少女によって

信じられない、剣の腕は初心者と言え、契約によりドラゴンの力の恩恵を受けているのだ、その剣戟を3本指で受け止めるとか・・・  
・・・色々とシヨックだ・・・

「だ！？……誰だアンタ！？」

剣を引こうとするが、ビクともしない

「ふふふ……まだ気付かないのか？アホウが……」

「え？……レス……テア……？」

外見はまったく異なるが、少女の放つマナは、レステアのそれだった。



「いかにも・・・しかし、ご主人様に剣を振るうとは、躰のなっていない犬だな。」

そうだな、主人の教育がなっていないのだろう。と、いつもなら軽口もたたけるのだが、俺にそんな余裕はなかった。

「どんなファンタジーだよ・・・」

俺の言葉を聞き、少女は満足そうに笑った。

## 第5話 氷解（後書き）

5話おまたせしました！

って、待っていてくれるのかな！？

でも、10人は待っていてくれるよね？

お気に入り登録10件いったし！！

感謝感謝です！！

## 第6話 思惑の英雄

やっとだ……やっと召喚術が使えるほどに力が戻った。

一時はどうなる事やらと正直肝を冷やしていたが、あれ以来人間どもが来なくなり、光秀を上手く使えた私の手腕も回復を早める要因となった……さすが私だ。

翼を失ったのは筆舌に尽くしがたい屈辱、憎悪、怒り、苦痛……下手したら堕ちてしまいそうなほどの荒れ狂う負の感情に押し流されそうになったが、光秀の情けない面を見たら急にバカらしくなった。

ああ……分かってる、ただ認めたくないだけだ。

身体も軽くなっただし、光秀に頼りつきりというのも癪だ。だから、少し早い“アレ”を召喚するでしょう、遅かれ早かれいずれは使う事になるのだからな。

器よ、我が眠りし器よ

楔を解きて現われ出でよ

ウ・・・

ウロ・トラトウ・ウロ・トラト

最後に使ったのが62年前、細胞組織が劣化していなければよいのだが・・・

魔方陣がめぐるしく形を変え、光を放つ。

ここから遠く北のアーテスタ山脈に眠る私の人間としての器が、瞬時に呼び出され形を成す。

『うむ、62年前と寸分違わぬ姿、状態も良好だな』

さすが私の封印術だ、あとは“コレ”に入れば・・・

「ただいま~~~~~と・・・」

帰ってきたか、なかなかタイミングのいいヤツよ。

「おい、レステア？どうした？傷でも痛むのか？」

ふふ、動かない私を見て動揺しているな、傷などすでに治っているのにな。

「おい!」

本当に光秀は不思議なヤツだ・・・。  
ハイドラゴンである私を怖がるどころか、しなくてよいと言っているのに、かつてに傷の手当てまでやり

「やるなと言われようがやる、俺の命もかかってるんだ、大人しく塗られてろ。」

などとほざく、私があやつに命令した事は、「食事を運んで来い」これだけだ。

52

そのくせ、記憶を見せろと言えば

「そんな生き恥さらす位なら死んだ方がマシだ!」

などと命令を拒否する。契約しているのだ・・・。  
契約は絶対なのだ!私の命令を拒否する事など絶対にできないのだ!!魂まで掴んでいるのだぞ・・・。

まあ、そういうところが、光秀の面白いところでもある。

私の知っている理をことごとく壊していく、ここまでくれば爽快なほどだ……

光秀の話も面白い、私さえ知らぬような理、本当か嘘か宇宙の誕生まで語る。

しかし信じられない、今より発達した文明から来たとは言ったが、人間ごとき矮小な存在が、宇宙へ飛び立ち、宇宙の神秘を解き明かすほどのポテンシャルを秘めているなど……

いや、光秀の心を読めるのだから、それが、少なくともあやつが事実だと信じている事だというのは分かる。

光秀は、いい加減で、愚かで、そのクセ妙なところで几帳面で、お人よしで、今も動かない私の事を本気で心配している……

ああ……分かってる、ただ認めたくないだけだ。

私が、彼に救われているという事を……

「ふふ、動揺しすぎだな」

光秀の背中に声をかけると、彼は慣れない手つきで剣を抜いた。

ああ、鈍い鈍い、剣を抜くのに、そんなに手間取ってたんじゃ斬り殺されるぞ？

振り向きざまに剣で斬りかかってきたが思いっきりがない・・・当たったら危ないかな？なんて甘い事考えるな、そんな腑抜けた剣戟など3本指で十分だ。

「だ！？・・・誰だアンタ！？」

バカもの、自分のご主人様位一目で見分ける。

「ふふふ・・・まだ気付かないのか？アホウが・・・」

「え？・・・・・・・・・・・・・・・・レス・・ティア・・・・・・・・？」

ふふふ・・・・・・・・なんてマヌケ面・・

「いかにも・・・・・・・・しかし、ご主人様に剣を振るうとは、躰のなつてない犬だな。」

「どんなファンタジーだよ・・・・・・・・」

なんて言いつつ「犯罪的な美しさだな」なんて思ってるんだからこの男は面白い。

「本格的にここを私の家にしようと思ってな、それにはクローラーやサンドワーム、モールといった手駒がほしいのだが、この近くだと王都近辺にある『エルザイアの迷宮』と呼ばれるダンジョン位にしかないのだ・・・・・・・・」

「もしかして、その手駒とやらを手に入れるために」

光秀が心底嫌そうな顔をする。

「そうだ『エルザイアの迷宮』に入る。迷宮内で、元の身体では窮屈だしな、空も飛べない今となってはコッチの方が小回りもきく



「何かと便利だ。」

「ええ~~~~~」

危険なのは嫌だな~~~~なんて思っている。

「それに、ドラゴン討伐隊の募集をしたのだろうか？では、冒険者として内部に入り込み情報収集をするのもよかるう？」

ひさしぶりなのだ

「どうせ、俺に決定権はないんだろ？」

こんなに充実した気分は

「もちろん、強制だ」

とびつきの笑顔で答えてやる。

「ふう〜〜〜〜手間とらせやがって・・・」

全長30mはありそうな怪鳥は、ヴォルトバレットにより、ようやくその鼓動を止めた。

「流石ロレッツオ殿です！！まさか怪鳥ヴァーヴァログを御一人で倒すとは！！」

「ロレッツオ様は我れらの英雄です！！」

「英雄誕生の瞬間を目の前で見れるとは！！」

オリードの王が気休め程度によこした雑兵どもが俺の勇姿に酔いしれ歡喜を上げる。

「英雄ロレッツオ！！我等が英雄ロレッツオ！！」

「英雄ロレッツオ！！我等が英雄ロレッツオ！！」

「英雄ロレッツオ！！我等が英雄ロレッツオ！！」

このボンクラどもは、戦闘に関してはクソの役にも立たなかった。  
・・・が、それでいい。

大切な事は俺が一人で倒したという事、そしてそれを見ていた人間  
がいるって事だ。

これで、怪鳥ヴァーヴァログを倒した英雄は俺、ロレッツォ・パー  
ルナッツって事になった。

ポシエットから、英雄に屠られし魔獣のリストを出す。

書き変えた英雄伝説はこれで3つ目、そろそろ頃合なのが『ケベ  
レスの邪竜』、せっかく召喚術教えてやったんだ、いくら役立たず  
のエルベナル騎士団でも、多少は弱らせてくれただろう。  
しかし、邪竜による大きな被害はまだ出てない。

歴史に余計な齟齬そごがでてきてるって事か・・・

まあいい、大した被害の出でない今、コイツを倒しても旨味がね  
え・・・コレは先送りにして・・・

次はコイツだな・・・

ページをめくり、次のターゲットを確認する。

エルザイアの鬼・・・

「ロレッツォ殿！ヴァーヴァログの首、馬車に乗せ終わりました

！！」

「お～～～し、さっさと帰って、宴にしようぜ」

「はい！！皆、ロレッツォ殿の帰還を心待ちにしているでしょう

！！」

「そうだな～～なんてったって、英雄だからなあ～俺は」



## 第6話 思惑の英雄（後書き）

5話投稿した後から、すごくお気に入り登録してくれる人が増えて、  
いつの間にか日刊13位……

本当ですか？私は、夢でも見てるんじゃないのだろうか……

とにかく！！読んでくださってる皆様に感謝感謝です！！

## 第7話 それぞれの思い

『エルザイアの迷宮』はエルベナル王都近郊に広がる『魔女の森』その中で、獲物が入ってくるのを待ち構えているかのごとく口を開いているらしい。

地下に広がる巨大な迷宮は何階層にも区切られ地下深くに伸びており、1階層以降になると、まるで迷宮そのものが生きているかの様に、つねに構造が変化し、数々の冒険者を飲み込んでいった、通称『人食いの迷宮』と呼ばれ恐れられている。

しかし、迷宮内には目も眩むような財宝や、失われし古代の魔道器、神々の英知が眠ると言われ、夢とロマンを求める冒険者が後を絶たず迷宮攻略に挑んでいる……らしい。

その迷宮が経済の潤滑油となり、エルベナル王国は栄え、小国が大國になりえたと言うのだから皮肉なもんだ……

そしてその迷宮の3階層以降に生息しているらしい、巨大な穴掘り芋虫『クローラー』と契約し、家の増改築をしようというのが今回、レステアがわざわざ人の姿になった理由……らしい。

なんでも、人間としての身体を最後に使ったのは62年も前らしく、リハビリと準備を兼ね5日ほど出発までに期間をとる事にした。

その準備期間中に俺は、人の姿の間でも本体は寝ているような状態なだけで腹は減るらしいレステアの本体が、旅の間に腹を空かせぬよう、大量の家畜を市場で買い込み、畜産農家の生活を潤す。

なんとレステアは、2つの身体を自由に移動でき、食事及び縄張り内に不審な者が入ってきた場合にはドラゴンの身体に戻るらしい・・・すごく便利だ。

しかし、買出し以外にもやらなければならない事があった。

レステアのリハビリに付き合う事・・・というの名ばかりの、レステアによるしごきだった。

「光秀！！剣を手首で振るな！！何度言えば分かるのだ！？肘で動かせ！！」

「足捌きが悪い！！それでは自分の足を斬ってしまうぞ！！」

「そんな腕で私の相手が務まるか！！このゴミムシが！！」

「いいかげんマナの扱い方を覚える！！ゴミムシですらもつとまともに扱えるぞクソムシが！！」

とても62年ぶりとは思えないほどの身のこなしで剣を振るい、本体時と遜色のないほどの魔法を放つその姿に、もはやリハビリなど不要と思われた。

「立て光秀！！まだ動けるだろうが！！」

外見は見目麗しいティーンエイジャーといったところだが、中身は



鬼教官だ。

「いやいや、朝から動きっぱなしだし、チヨット休ませてくれよ。  
・もう若くないんだし」

パアーーーーン！！

思いつきり後頭部を叩かれた。

「貴様！！そんなに軟弱で」  
「チツ……うっせーよ……」

「なんだ？その態度は……」

比喩ではなく、文字通り空気が凍りつき、水分が空中で結晶となりですが、それにビビッて頭を下げるのも癪だ。

「ただ休みたいと言っただけだろ？何ピリピリしてんの？」

一度溢れ出すと、日頃押さえてたストレスが怒りとなり、感情を支配してゆく。

「ワケも分からず理不尽に召喚されて、帰る術も分からずドラゴンの下僕にされ、毎日おもりに明け暮れる日々、終いには休憩すらも与えてもらえず殴られて、とんだ災難だわ……」

俺の周囲の空気が凍りつき始める……どうやら怒りにより引き起こされる現象らしい。

そんな俺を睨みつけていたレステアは、くるりと踵を返すと洞窟に入っていた。

今のは、俺悪くねーよな・・・おう、全然悪くねえ・・・

と、洞窟の奥で“何か”が光っている・・・

あれは・・・・・・・・・・・・・・・・ヤバイ!!

咄嗟に身体を投げ出すと、今まで俺がいた場所を炭にして火球が通り過ぎて行く

洒落になってない!!

今の一撃は、殺すつもりの一撃だ

と、銀色の巨体が大砲のように洞窟から飛び出て来る

世界から色と音が消え失せる

これは俺の体自身が、余計な情報をシャットアウトして視覚に集中させているのだ、そうしないと

間違いなく殺される・・・

反射的にバックステップをすると、目の前の地面がドラゴンの前足による一撃で無残に抉れる

が、避けられる事を見越していたように身体を反転させると、尻尾で次の攻撃を繰り出す

動作が異常に速い上に範囲が広い一撃、俺は避けることを諦めると咄嗟に剣でガードし、防御結界を

が！駄目！！

まともに魔法が使えたためしがない俺が、この刹那で防御結界を張れるはずがなく、そのまま剣を真っ二つに折られ、腕、アバラが折れる音を初めて耳にした

「ガハッ!!」

そのまま弾丸のように飛ばされ、溪谷の下へと落ちていく  
体勢をなんとか整えると、そのまま川へと落ちた。

ドラゴンは、追って来なかった……………。

「ゲホ…………ゲホゲホ…………」

血と水を吐きながら、何とか川から上がる。

…………クソッ

あれは本気だった

本気で俺を殺そうと・・・。

何故だか涙が溢れた。

殺されかけた恐怖や

生き延びることができた安堵感ではなく

心に渦巻く感情は

もっと違う、心地の悪いものだった・・・

「……………なんだよ…ツツ!!」

息をすると胸に激痛が走る。

俺は死ぬかも知れない…

医療技術が発達してそうには見えないこの世界、アバラをバキボキに折られ、もしかしたら肺に骨が刺さってるかも知れない。

なのに…

なんであのドラゴンの事ばかり考えてんだろ…

殺されかけた…どころか、死ぬかもしれないダメージを負わされたのに…

なんで、怒りではなく、こんなに悲しいんだろ…

「そ…その程度にしか…思ってたのかよ…」

ツツ!!」

所詮は下僕か？

ただの使い捨てか？

ふざけんなよ!! 散々こき使いやがって!!

恩を仇で返されるとはな!!

あんのクソ爬虫類がツ!!

「でも……おもりは言い過ぎたかな……」

もう、ダメだ……分かってたのに……

「バカみたいな話だが……」



俺はアイツに、レステアに……

ずいぶん前から惚れている。

「殺されるかも知れないな……」

痛む身体をなんとか起こすと、すでに日が落ちてしまった森の中を歩き出す。

それでも

これで終わりってのは絶対に嫌だ!!

あやつ……矮小なクソムシの分際で、この私に楯突きおつて  
!!!

ほんの少し気にかけてやれば、何を勘違いしたのやら調子に乗り  
すぎだ!!

私の爪で引き裂いてやればよかった!!

まあ、致命傷は与えた……

あやつから伝わる波動も徐々に弱くなっていつておるし、私が手を下すまでもないであろう……

そう、私が手を下すまでもなく……死ぬ。

そうだ、ゴミムシの分際で高貴な私に楯突いたのだ、万死に値する!!

死んで当然なのだ!!

『何が……誓いますだ、嘔吐きめ……ッ!!』

なぜだ？

なぜ、私の声は震えておるのだ？

怒りだ!!

そう、怒りすぎてッ……体まで震えてきた……

何だ・・・

何だと言っただこの感情は！！！！

あやつは私を裏切り、誇りを穢した！！

当然の報いじゃ！！

死んで当然じゃ！！

そしてあやつはもうすぐ死ぬ！！

なのにッ・・・

なぜこんなにも気分が悪いのじゃ！！！！

嫌じゃ！！！！

嫌じゃ！！

もう光秀に会えぬなんて・・・

死ぬなんて許さぬ！！

わらわは・・・ッ！！

「よう・・・レステア。」

！？

光秀ッ！！

『何だ……ころ……殺されにでも戻って来たのか……？』

「さっきの事、謝ろうと思ってな……」

光秀は不器用に笑顔をつくる。

この顔は、わらわが翼を噛み千切った時「泣いてないから」なんて言いながらつくった表情じゃ

「あれさ……俺のためにしてくれたんだよな……こんなに弱い俺だったら、ダンジョンなんて入った瞬間死んでしまうから

……」  
『う……自惚れるでない……わらわのりハビリのためじゃ……』

「だから、ごめん……そして、ありがとう。」

わけが分からぬ・・・おぬし、死ぬのじゃぞ？

わらわがやったのじゃぞ？

なんで・・・

なんで、それでも・・・

そんなにも・・・

わらわの事を好いておるのじゃ？

ドサッ・・・

光秀は、それだけ言うと、その場に倒れた・・・。

『ゆ……許さぬぞ光秀！！！！わらわはおぬしを決して許さぬ！！！！』

わらわは寂しかったのじゃ

『目を開けよ！！命令じゃ！！まだおぬしにはやらねばならぬ事があるのじゃ！！』

ずっと独り……

『光秀ッ！！聞いておるのかッ！！』

光秀が死んでしまう！！

また独りになってしまう！！

そごじゃ！！わらわの(デレコロ)血とマナがあねび……

『待っておれ光秀！！今ッ……！！』



口の中に鉄の臭いが広がる。

手で光秀の口をこじ開けようとするが、なにぶん小さい・・・

わらわの（ドラゴン）手では難しい・・・なら、直接！

光秀に口付けをすると、息を吹きかけるように血を送り込む

ビチャビチャビチャッ！！

光秀の顔が血で赤黒く染まる。

これだけあればよいであろう！！

み・・・光秀を治すのじゃ！！

今すぐ光秀を治すのじゃ！！

トリカトリカ・トリ

カトリカ

朝だ・・・

右目が開かない・・・何か糊のようなもので接着されてる・・・

べり……べりべり……

「なんだ、この黒いの……血？血か？」

『光秀！！起きたのか！！』

どうやら、巨大なドラゴンの掌で寝ていたらしい、レステアが慌てた様子で俺の顔を覗きこむ。

「おはよう……」

ちよつと気まずい……

『わ……わら……私に楯突いたおぬ……お前がわ……悪いのじゃぞ？』

な……なんか、キャラ変わってませんかレステアさん？

『う……』

「昨日は、本当にごめんなさい、あれは俺が悪かった……慣れない環境とか、悩みとか、ストレスとか……レステアにぶつけてしまった、本当にすまない。」

『わ……分かれればいいのじゃ!!じゃが、昨日ではなく、4日前じゃ……だ』

じゃだ?

「4日も……まあ、相当瀕死だったからな!!あはははは……」

『ばかもの……体調はどうだ?』

「すこぶるいいな……体がいつもより軽い気がする」

『そうか、なら遠慮なく4日分の仕事と、遅れたエルザイアへの準備を押し付けれるな』

……鬼

『鬼、とか思ってるんじゃないだろうな?』

「お、思ってるねーから! !じゃ、体洗って仕事仕事! !」

マジ、鋭すぎるだろ・・・

『・・・光秀ツ! !』

「何?」

川へと進めた足を止め振り返る

『わ、わらわの方こそ……すまなかつた……』

うわ………犯罪的な可愛さ……

『な……もう行け!! さっさと働け!!』

「はいはい、ご主人様」



第7話 それぞれの思い（後書き）

きゅん—————

1位あつわつー！日刊1位とれるだなんてー！

ありがとうございます！ありがとうございます！……



## 第8話 エルベナル王都にて（前書き）

レステアの一人称ですが「私」と「わらわ」の二つがあります。

もちろん、日本語で話しているのではないので、実際に「私」「わらわ」と言っているわけではありません。

「私」は、わりかし一般的な大人や貴族が使う一人称。

「わらわ」は少し古臭く、育ちのよい子供が使っていた（今はあまり使われない）一人称と言うようなニュアンスで捉えていただければ幸いです。

他にも、ものの単位やモンスターなど、読みやすいように馴染みの単位（cm、?、kgなど）や英和名を使っています（ドラゴン、サンドワーム、鬼など）が、実際は異世界の単位や名称なのだなど、脳内変換していただければ、これまた幸いです。

今更このような勝手を押し付けてしまう事を深くお詫び申し上げます。

ごめんなさい！！><

## 第8話 エルベナル王都にて

肩より少し上の辺りで切られた眩しいほどに輝く銀髪

覗き込む者に畏怖を抱かせる威厳に満ちた金色の瞳

身体から迸る力強く威圧的なマナ

透き通るほど白い肌と人間離れした美しい造形

その少女は、私が今まで目にしたものの中で最も気高く、美しい存在……

そしてその少女は、幼さの残る、しかしそれを感じさせない凜と澄んだ声で語りかけてきた。

「ホグルードのステーキ、パンにスープ、それと果実酒だ」

「は、はい……」

緊張で声がうわずってしまった。

「あくじゃあく俺はベラムの骨付き肉、パンスープに果実ジュースで」

少女の向かいに座っている、夜を溶かし染めこんだような黒髪に黒い瞳、どこか異国風の顔立ちをした男は眠そうに告げた。

「……………はい」

怪しい……………なんなのだろうこの2人は。

白と黒、見た目も雰囲気も、何から何まで正反対の2人

「何なんでしょうね、あの2人……………」

パシッ!!

話を振ると、厨房で料理をしていた店長に頭を叩かれた。

「バカ、ああいうヤバイ雰囲気の中に関わろうとするな……………死ぬぞ?」

冒険者が多いこの街で長年商売してきた店長のセリフには、重みと説得力があった。

「は、はい……すみません。」

「ギルドで聞いた情報によると、エルザイアの迷宮の3階層以降には今、英雄殺しの鬼が出没するそうだ。何でも前大戦で英雄となつたナントカっていう人と、討伐に出かけたナントカって宮廷魔術師が殺されたのだとか……この国の一大産業となるエルザイアの迷宮探索が滞っては傾国しかねない由々しき事態だと。鬼を倒した者には破格の報酬と地位を約束するとか……」

冒険者ギルドで今しがた仕入れた情報をレスティアに報告する。

「ふむ、ドラゴン討伐隊の募集はどうだった？」

「ソッチはとりあえず一時的に中断、実害のある鬼の方が今は脅威だという事らしい。」

「なるほど……それなら、鬼は放置しておいた方がよいな。」

と、注文の料理が運ばれてきた。

「おまたせしました。」

食欲をそそる肉や香草、スパイスの絡み合った香りに鼻腔をくすぐられ、思わず唾液を飲み込む。

「ふふ・・・光秀、欲望丸出しの面をしているぞ、卑しいヤツめ。」  
意地悪く口角を上げるレステアの顔が可愛いすぎる・・・

「ここ2日間、ずっと馬トカゲに乗ってた上に貧しい食事だったからな、疲労と空腹で倒れそうだ」

恐竜ヴェロキラプトルのような生き物に乗ってここエルベナルの王都まで2日間もかかった。

値が張るので1頭に二人乗りでだ、変にドギマギするとそれを見透かしたように「私に欲情しておるのか？」などと聞いてくるのだから、疲れないわけがない・・・色々な意味で。

「ん・・・心配するな。温泉付きのいい宿をとっておいた、今日はゆっくり休め。」

殺されかけて以来、前より優しく接してくれるようになった気がする・・・

「勘違いするなよ？お主に倒れられたら面倒だからな。」

テンプレのツンデレきた!!・・・なんたるこの気持ち・・・

「~~~~ツ!!ほら、さっさと食べ!!」

「話は聞きましたぞロレッツォ殿、オリード王国の悩みの種だった怪鳥ヴァーヴァログを仕留めたとか・・・」

エルベナルの狸大臣ガーヴァツソ・ムニエル。  
後にエルベナルの王を討ち、オリード王国を飲み込むと、新国ガーヴァツソ帝国を建国、後に魔王に滅ぼされる事となるまでの僅か5年間、帝王として君臨する男だ。

まあ、いけ好かねえ〜ヤツだから俺がさせね〜けどなあ〜

「おっと、そう苦そうな顔をするなって、アンタんトコも助けてやるからさあ〜」

「苦そうな顔なんてしておりませんよロレッツォ殿、わたくしめはただ純粹にロレッツォ殿の武ゆ」

「友好条約を結んでいるとは言え、仮想敵国であるオリード王国に塩を送るようなマネをしくさってからにい〜〜これだから政まつじごとの分からぬ野蛮なサルは嫌なのだ！！って顔………してるぜ？」

「ッ！ー！い、いくらロレッツツオ殿でも、言つてよい事と悪い事が！ー！」

「あ〜あ〜悪い悪い！！ただのお茶目だって、そんなにムキになられると逆に怪しく見えちゃうなあ〜」

「ッ！ー！」

さて、イジメンのもこれ位にしとくか

「で、そんな事より、わざわざ隣国に使い飛ばして俺を呼び戻すほどの大事な用件があるんだろ？」

腹に据えかねる！！って顔をしていたが、なんとか気持ちを切り替えたらしい、用件を語り出す。

「実は困った事に、我が国の一大産業であるエルザイアの迷宮で、近頃捨て置けぬ害獣が現れましてな……」

「知ってるぜえ〜エルザイアの鬼だろ？ここに来る途中、使いに聞いたわ。」

「それならば話が早い、早速討伐していただけないだろうか……」

「





~~~~~それを考えると良心的だと思っただけだなあ~~~~~  
そうだろ?」

これで断ったら、俺に厄介ごとを押し付けようとしてたと認める  
事になっちまうぜ?狸ちゃん?

「よ、よかるう……陛下にはそのように伝えておく。」

「支払いシブんなよ?そんなじゃあ~~~~~なあ~」

っと、去る前に、もう少し脅しておくか……

「あ……陛下によろしく言っついてくれよ」

「うむ」

「それと……アンタの可愛がってるお人形子  
ヤンにもな……」

「!?!?.....き、貴様.....」

「なあに?」

「.....ツク!」

なぜ知っている!?!?って面してるなあ~~~~~

「またな、ガーヴァッソ大臣」

「光秀！！温泉に入るぞ！！実はわらわ、その存在は知っておつたが実際に入るのは初めてなのじゃ！！」

「おう、先に入ってきたらいい」

レステアが借りた部屋は、一部屋に一湯付いた宿、というより最早旅館と言って差し支えない豪華なものだった。

「何を言っておる？一緒に入るのじゃ、わらわの身体を洗つのはお主の仕事であろう？」

「はひい？」

「何素つ頓狂な声をあげておる？」

「いやいやいやいやいや！！それはないわ~~~~~」

「なぜじゃ？いつも洗っておるではないか。」

「いや、それは本体の方でしょレステアさん！！あーた、人の姿の時は」

「そう言えば封印を解いて以来洗ってないな・・・念入りに頼むぞー！」

「ね、念入り！？・・・ダメだレステアさん！！それはダメだ！！！」

「なぜじゃ？」

な、なぜってあーた・・・

「ん？」

「とにかくダメだ！！いいか、『男女七歳にして席を同じうせず』  
と言ってだな」

「つまらぬ！！命令じゃ！！一緒に入れ！！」

~~~~~ツ!!

そ、そりゃあ〜俺だっぺ入りたいさあ!!男性だもの!!

「よ……して……だよ」

「何じゃ聞こえぬ!」

「欲情してしまうんだよ!」

……

「光秀!!この身体には欲情して、何故わらわの本体では欲情しないのだ!!」



「……………じゅん」

「……………ぼかも」

**第8話 エルベナル王都にて（後書き）**

皆様、本当にご愛読ありがとうございます。御座います。

次からは、ちょっとシリアスな話になる予定です。

それではまた次のお話で^^



第9話 鬼物語（前編）（前書き）

外伝みたいなものです。

鬼の身の上話です。

レステアと主人公はでてきません

## 第9話 鬼物語（前編）

エルザイアの迷宮7階層

「クソツタレがああああああああ！！」

ハルバートで、人の丈ほどもありそうな巨大蜘蛛の頭を力ち割ると「ピギユ〜〜〜！」と気色の悪い断末魔をあげ、白と黄色の体液を撒き散らしながら絶命した。

シュバツ！！シュバツ！！シュバツ！！

その断末魔を聞いた蜘蛛の仲間がダンジョンの奥から次々と湧き出し、飛ばしてくる粘着性の強い糸を、無骨で巨大なタワーシールドで受け止める。

「まだか！レンネットおお！！！」

後ろで術式を組み立てているペンテ・レンネットに声をかける。

彼女はファールー族のスゴ腕女魔道士で、小さな身の丈からは想像できないほど強力な術式を組上げる。

「ムギイーできた！！避けてブラニツツう〜」

燃え盛る灼熱の息よ

我が敵を焼き尽くせ

ドラゴンブレス!!

「ば、バカッ!」

慌てて通路端に倒れこみタワーシールドで自分の身体を覆うと、  
その刹那

キユゴオオオーーーーー

圧倒的な熱量と騒音が空気を振るわせる

「ムギ・・・大丈夫?」

タワーシールドの外から俺の様子をレンネットが伺っている。

言いたいことはあるが、ここで口論する暇さえ惜しい・・・

「問題ない」

身体を起こすと、黒く炭化した蜘蛛の残骸転がる迷宫の通路を先

に進む。

「いいの？傍にいてあげた方がいいんじゃないの？」

「ファール族は、別名『小獣族』とも呼ばれており、成体でも人間族の子供位の背丈しかない。

そんな小さな彼女が、困ったような、悲しいような、そんな顔で俺を見上げながら幾度目になる質問を問いかけてくる。

「傍にいて何もできないより、俺は俺にできる事をやりたい・・・」

「でもッ！！・・・もう、フレインさんに残された時間は少ないんだよ？」

レンネットの頭から生えた獣じみた耳が、力なく垂れている。

「時間がないからこそ・・・だからこそ急いで最深部まで行き、『神々の英知』を手に入れる！！そうすれば、フレインを治す事のできる魔法とか、なんでもいいッ！！見つかるかも知れない、だからッ！！」

望が薄い藁だという事は、俺自身痛いほど分かっている。それでも掴まずには、すがらずにはいられなかった。

「ムギツ……………ブラニツツは……………分かってないよ、彼女の気持ちを」

「……………先を急ぐぞ」

## エルザイアの迷宮8階層

今までで到達、確認されている最深部は9階層、その奥に10階層へと続く階段を見た、後の生還者は語っている。

つまり、最短でもあと2階層はあるという事になる。

しかし、予想以上に消耗が激しく、しかもこのクラスになると1階層潜るだけで、敵のレベルはまるで別次元になる。

このままでは届きそうにない、その事実が俺を焦らせ、さらに消耗を激しくさせていった。



ここまでレンネットと2人でなんとか到達した。  
独りで来たのなら、帰り道など気にしない潜行もできたかも知れないが、そんな俺の自殺行為にレンネットを巻き込むわけにはいかない。

漏れそうになる嗚咽を必死にかみ殺す……俺は彼女を……

フレインを守れなかった。

ガシャン……

モンスターの体液で汚れたハルバートとタワーシールドが、手から滑り落ちる。

「う……………うぐ……………」

もう、嗚咽をかみ殺す事も、わらう足で踏ん張って立っている事もできず、その場に膝をつく。

そんな俺の頭を胸の辺りで抱きしめると、レンネットはくしゃくしゃと撫で、優しく囁く。

「帰るっ？今ならまだ間に合うから、帰ってフレインさんの傍にいてあげて……………ね？」

「う……………う……………あ……………あ……………あ……………あ……………」



泣き叫ぶことしかできない俺を、レンネットはただ、ただ……  
優しく撫でてくれた。

8階層まで相当無理して来たツケを帰りに払わせられる事となり、  
帰りはかなり苦勞する事となった。

途中で道具も薬も食料も切れ、マナの回復が追いつかなくなったレンネットを庇いながら、ようやく見えた迷宮の出口に喜んだのもつかの間、満身創痍で迷宮から出た俺たちに、さらなる追い討ちをかける知らせを、迷宮の見張り番であるエルベナル兵から聞かされる。

「ブラニッツ殿！！レンネット殿！！帰還なされたら、至急フレイン様の所へ来るようにと、カーレン様より伝言が入っております。」

ガシャン！！

それを聞いたとたん、装備を投げ出し俺は走っていた。

まさか……そんな！！まだ猶予は残されてたハズだ！！

「ムギー！！キミ、ブラニッツの装備よろしく頼むね！！」

「ハッ！！この命に代えても！！」

俺と、フレイン、レンネット、カーレンは戦友だった。

5年前、大陸全土（四つ国）を巻き込んだ大戦で、レンネットとカーレン、流派は違えど、その類稀なる魔術の力で数多の敵を討ち滅ぼし、レンネットは『エルベナルのファイアドラゴン』カーレンは『エルベナルのウォータードラゴン』などと呼ばれ恐れられていた。

フレインは肉体強化や魔法剣などを駆使した一騎当千の凄腕ルーンナイト『戦場の死神』

俺は自身よりも巨大なタワーシールドと、これも巨大なハルバートを振るい、魔術を組み立てるまでの間3人を守った。付いた二つ名は『鉄壁の要塞』

そんな俺達4人は、大戦後に『エルベナルの四英雄』などと歌われたが、俺は喜べる気にはなれなかった。

それは最も守りたかった最愛の人、フレイン・ヴォーイツシュを守りきれなかったから

彼女は大戦中に、失われしエンシエントスペル（古代魔術）の最後の使い手である、賢者デルヴェエラードに止めを刺した際、カース（呪い）をかけられてしまい、彼女が受けたカースは、エンシエントスペルによる死を伴う強力なものだった。

そのカースの解呪方法はレンネットやカーレン、賢者と歌われる者にさえ分からず、唯一エンシエントスペルに精通したデルヴェエラードはカースをかけた張本人であり、すでにこの世にはいない。

八方塞のその状況で、唯一望みを見出せたものが、迷宮の奥深くに眠るといわれる『神々の英知』だった。

『神々の英知』には、全ての理を覆すほどの大いなる魔術や、天界への行き方、神になる方法すら記されてあると言われており、それならばフレインにかけられたカースを解く方法も分かるかも知れないうと、迷宮攻略に一縷の望みを託した。

俺とレンネットは、エルベナル王国の危機には召集されるという条件付きで騎士団長、宮廷魔術師の立場をそれぞれ捨て、迷宮攻略に費やす日々が始まった。

しかしそれは、カースによる激痛に苦しむフレインを見たくない、

そんな現状から目を背けたいがための逃避でしかなかった。

潜るたびに構造が変化する迷宮を攻略するのは難しく、6階層まで行く事も数回、7階層など2回しか足を踏み入れる事ができず5年も費やした。

遅々として進まない状況、徐々に、しかし確実に弱ってゆくフレイン……そして12日前、とうとう大きな発作を起こし、宮廷に仕えるヒーラー（治療魔術師）に余命20日前後だと告げられた。

「フレインッ！！！」

衛兵が守る病室のドアを勢いよく開ける。

病室には、治療を続けるヒーラーの他に、戦友のカーレン・ブックス、フレインの双子の妹ルーア・ヴォーイツシュ、そしてこの国の王、クーリード・エルベナル王が沈痛な面持ちでフレインを見守っていた。

「ブラニッツ！！レンネット！！よかった！！間に……帰って来たんだな……」

敵に囲まれた時でさえ涼しい顔をしているカーレンは青ざめており、王の訪問と併せて、事の深刻さを物語っていた。

「ブラ・ニッツ?・・・よかった・・・もう会えないんじゃないかと・・・ツツ!!思ってたんだから・・・ばか」

体中を駆け巡っているであろう激痛を必死に堪えながら、やっと言葉を紡いでいるフレインの姿を見て、心が張り裂けそうになる。

「フレイン・・・すまない、俺は・・・何もできなかった・・・」

触れるだけで折れてしまいそうなほど細い彼女の手を、両手で包み込む。

「何言ってる・・・の?・・・こうして、手を握ってくれてくれるじゃない。」

彼女の微笑みは、春の花より可憐で美しく・・・風に舞う花弁より儂い・・・

「・・・ツ・・・すまない・・・キミを、守れなかった・・・ツ」

視界がぼやけ、上手く呼吸ができなくなる。

「ばか……こ……これ以上、ブラニッツに望んだら……  
警沢だ……ッ……て、神様に怒られちゃうよ……」

ガタッ！！

椅子に座っていたルーア・ヴォーイッシュが立ち上がる。

「姉さん……この男がダメならば、私が『神々の英知』を持  
ってくるよ」

そう言つと、そのまま病室を出て行った。

「あの子……腕は……ッ……確かなのだけれど……チヨ  
ッとおばかなのよ……ふふ……そこが、可愛いのだけれど……」

そう言つと、涙を必死で堪えながら、フレインは言葉を紡ぐ。

「もう………会えなくなっちゃうの………にね……」

「フレイン……」

「ああ………ねえ、最後に一つ………ワガママ………いい  
かな？」

フレインの言葉に、黙って頷く。  
今、声を出したら、もう、嗚咽を堪える自信がない……。

「あの子を……守ってあげて……あの子、冒険者には……  
向いてないの……でも、言っても無駄……だと、思うから……  
……はあ……」

もう一度、力強く頷く。

「ふふ……神様に……怒られちゃう……かな」

「はあ……ごめんね……レンネット」

「ムギ……なんでアタシに謝るのよ……ばか」

「カーレン……あなたは……早くお嫁さん……見  
つけなきゃ……」

「……余計なお世話だ」

「クーリード王……最後まで……ご迷惑を……」

「よい……そなたは、我がエルベナル王国の英雄だ。」

「オーグデンさん、最後まで……本当に、ありがとうございました。」

フレインの治療を続けていたヒーラーが、静かに頷く。

「ブラニッツ……あなた、意外と泣き虫なのね……  
ふふ……」

頬を伝う涙を、フレインが静かに拭う……。

「ありがとう、愛を教えてくれて、私とっても幸せだったわ……  
」



最後の力を振り絞るように、しっかりとそう告げると、彼女は笑って……静かに逝った。

その後、迷宮に無理矢理入ろうとするルーアと、それを引き止める見張り番の元へ、フレインが亡くなった知らせが届き、ルーアは力なくへたり込むと、しばらくその場から動こうとしなかったらしい。

葬儀が終わり、一段落ついた頃、ルーアは冒険者ギルドで登録を行っていた。

前回、迷宮へ入ろうとした際「ギルドカードがないと迷宮には立ち入る事はできない！」と見張り番の兵に止められたからだ。

冒険者になる事を止めたが「姉さんの生きた世界を見たい。」そう頑なに聞き入れようとせず、ならば一緒にパーティーを組もうと持ちかけるも、これも却下される。

「姉さんを守れなかった人達の力なんて借りない」

そんな彼女に、レンネットは「それがフレインの遺言でも？」と問いかけ、渋々ではあるが、ルーア・ヴォーイッシュは、俺とレンネットのパーティー『オストロス』の新たなメンバーとなった。

「冒険者ギルドには、冒険者個人と冒険者の集ったパーティーを評価する、ランキングシステムが存在する。」

これは、クエスト（依頼）をこなしたり、討伐したモンスターによって加算されるポイントと、こなしたクエスト数や、その成功率などにより順位を決め、これにより、冒険者としてのレベルや信用を明確な形でユーザー（依頼者）に知らせる事のできる画期的なシステムだ。

ちなみに、ランキングに反映されるのは過去1年間のデータのみだが、ランキング上位に食い込めば冒険者としての名声と同時にクエスト（依頼）数も増え、報酬の交渉も有利に進める事ができるし、冒険者を辞めたとしても、その後の就職にも有利に働く。

元は俺やレンネット、カーレンに、知ってるとは思うがお前の姉さんフレインも冒険者だ。」

酒場にて、ルーアに冒険者のノウハウを一通り教え終わり、ふうと息を吐く。

「それじゃ、質問はあるか？」

するとルーアは少し考え、思いついた事を口にする。

「ブラニッツとレンネット、それに『オストロス』の順位は？」

「俺とレンネットは迷宮攻略で精一杯だったから、モンスターはずいぶん狩ったが、証拠の品を持ち帰ってないからな、2人とともに100位以下のランキング外だし、『オストロス』もランキング外だ。」

「リーダーは？」

「決めてない、目的は1つだったし、メンバーも2人だけだったから必要なかった。」

「しかし今は違う。」

「そうだな・・・やりたいのか？」

その言葉に、ルーアは若干眉を上げる・・・どつやら驚いているようだ。

「いいのか？」

「俺は構わないが、レンネットは？」

「ムギ〜アタシも構わないよ〜特に目的もないしね」

「では、私がリーダーだ、メンバーは私の指示に従ってもらおう。」

あ・・・何か、嫌な予感がする・・・

「まず、パーティーの方針だが、1ヶ月以内にトップ10入りし、最終的には1位をとる！」

(ムギギ・・・この子、話ちゃんと聞いてたのかしら?)

レンネットが小声で話しかけてくる。

(さあ・・・でも、フレインが・・・チョットおばかだと言っていたな。)

「次に、メンバーはリーダーに絶対服従である事!!」

(チョットじゃないわよ!!リーダーを何か別のものと勘違いしてるんじゃない!?)

(だんだん酷くなってきたな・・・でも、そこが可愛いとフレインが)

「そうと決まればブラニッツ!!今日はお前のおごりだ!!」

(△ギ~~~~~:~:~:ギが可憐さの~:~:)

(真に麗はめめ。。。)

第9話 鬼物語（前編）（後書き）

後編に続きます。

第10話 鬼物語（後編）（前書き）

グロあり、観覧注意です・・・

## 第10話 鬼物語（後編）

「私が先頭だ！リーダーだからな、次がブラニッツ、そして、後ろがレンネット！！」

「ムギイ~~~~！！なんで壁役のブラニッツが真ん中なのよ！！」

「壁役？そうか、ブラニッツは横・・・か？」

「ムギギギ・・・横は壁でしょうが、迷宮の通路はそんなに広くないのよ？」

「壁役なのだろう？」

「ムギギ~~~~！！話がかみ合っていない！！」

苦悩するレンネットに助け舟を出す。

「まあ、思うようにやらせてあげるのも手じゃないか？」

「ムギ・・・でも彼女、ルーンアーチャーよ？ルーンアーチャーが先頭なんて聞いたことないわ。」

たしかに、補助魔法や、矢に魔法を加付しての攻撃など、後方支援向きのスタイルである。

「大丈夫、俺が守る。それにまずは1階層での訓練だし、モンスターの大群でも出ない限りは何とかなるだろう。」

ルーアの戦闘技術は一流だ。

それは身のこなしや使い込まれた弓を見れば分かる・・・が、実戦での戦い方をまるで知らない。

しかも、発想がどれも最悪で、ルーアに任せると迷わず最も効率の



悪い選択をする。

そして、すこぶる運も悪かった。

「ゴブリンの群れに1階層で出くわすとかな〜」

「大丈夫だ、ブラニッツは私が仕留めそこねたヤツをたのむ。」

そう言うと、ルーアは自分の身体に強化魔法をかけ、素早く矢を打ち出してゆく。

放たれた矢は、正確にゴブリンの眉間を貫いていくが、あまりにも数が多く仕留めきれない。

しかし、意地でもポジションを動かこうとしないルーアにとつとつゴブリンの攻撃が迫る

ガッツ!!

「ムギ!?今、弓で殴らなかつた?」

「殴ってる、現在進行で殴ってる……あ、両手持ちで殴りだした。」

「ムギー!!!ルーア下がって!!!」

レンネットが声を掛けるも、下がる気配はない。

「仕方ねえな……」

ゴブリンに囲まれ、肩でゼエゼエと息をしながら、この状況に初めて危機感を抱いたらしいルーアは  
「ヤバイわ……」と小さく呻く。

そんな彼女の鎧を掴むと、そのままレンネットの方へルーアを投げる。

「ちよつと!」

「見とけ、お前は何もしなくていいから、俺とレンネットの戦い方を見とけ……レンネット!」

「ムギ」

レンネットが魔術を組み立て始める。

その間、ゴブリンが抜けないようにタワーシールドでガツチリガードしつつ、ハルバートで一気に薙ぎ払う。

唸る戦槍、舞い散る血飛沫、小鬼達の断末魔・・・

形勢は逆転し、ゴブリン達は肉塊へと変わってゆく。

「ブラニッツー!!」

レンネットの合図に、素早く下がる。

燃え盛る灼熱の息よ

我が敵を焼き尽くせ

ドラゴンブレス!!

前方は、火の海に包まれた・・・

「どうだった？俺達の戦いぶりは・・・」

俺の問いかけに、ルーアは俯いたまま呟いた。

「そうね・・・私が弓で敵を殴るより、ずっと効率がよかったわ・・・」

「ムギ、そりゃ長年2人で組んでるからね」

レンネットが得意げに言うと、ルーアはキッと顔を上げた。

「それじゃあ私は必要ないわねッ!!」

下唇を噛み締めたルーアの両目には、今にも溢れ出しそうなほど、涙が溜まっていた。

「でも、足りないんだよな・・・」

「ムギ・・・足りないわね。」

「何が足りないの!?ハッキリ言って悔しいけど、完璧だったわよ!!私が苦戦してた相手を顔色一つ変えず押し戻し、流れるようなスイッチで桁外れの魔法ッ!!リーダーなんて浮かれてた自分が恥ずかしいほど完璧な戦いぶりだったわ!!」

ルーアの泣き顔にフレインを重ねてしまい、心の蓋がずれる。

身体が硬直し、動悸が激しくなる。

それに気付いたのだろうかレンネットが、そっと俺の脚に触れ、ポンポンと優しくたたく。

「ふう……俺にはまったく魔法が使えない、だから接近戦しかできない。」

「ムギ……アタシは接近戦がまったくできない、だから魔法しかないの。」

「だから、もし不測の事態が起こったとき、例えば敵に挟まれたり、広い空間で戦闘になったりしたら、上手く対処できないんだよ……中距離、遠距離を素早いレスポンスでカバーしてくれる仲間が“今までは”いなかったからな。」

「ムギ……アタシもブリニッツも、弓の腕ではルーアの足元にも及ばないよ?」

レンネットは、そっとルーアの手を握ると、言葉を続ける。

「アタシ達にはルーア、アンタが必要なんだよ。」

それ以来、自分の役割を理解したルーアは、素晴らしいチームワークを見せる。

モンスターと遭遇した瞬間、俺と自分自身に肉体強化の魔法をかけると、バックをカバーしつつ前線に援護射撃を行う。

まあ、戦闘不能の敵に攻撃したり、攻撃してほしい敵をガン無視したりと、なかなか辛いところには届かないが、それでも3人は、まるでともとも1頭の獣であるかのような、三位一体の戦いぶりができるようになり、俺達のパーティー『ケルベロス』は、1カ月後には32位まで食い込む事ができた。

「チツ……トップ10は無理だったか。」

酒場で仕事終わりの酒を飲みながら、ルーアが悔しそうに呟く。

「ムギ！1ヶ月で32位まで食い込む事ができただけでも偉業よ！…異常なほどよ。」

「ああ、これならそろそろ、3階層に潜行してもいいかもな。」

四英雄が2人もいて、残りの1人も四英雄の1人、フレイン・ヴォーイツシュの双子の妹なのだ、ランキング外でも山のようにクエストが入り、成功率100%、しかも受けていたのは1、2階層の時間がかからないクエストだったため、大量にクエストをこなせたのが、短期間でここまで上がってこれた要因だった。

が、それを言うのは野暮ってもんだらう。

「ホント？ようやく3階層まで降りるの！？」

ルーアは3人でクエストをこなす内に、冒険者として、迷宮攻略に夢中になっていた。

「あ……ああ、ルーアの腕なら楽勝だらう……」

そして、そんなルーアが、最近よくフレインに重なるようになり、その度に俺は動悸と身体の震えが止まらなくなる。

（大丈夫、大丈夫、トリカトリカ・トリカトリカ）

でも、その度に、レンネットが優しく摩り、不思議な呪文を唱えてくれた。

トリカトリカ・トリカトリカ、レンネットも詳しい意味は知らないらしいが、その昔、古の神が地上に蔓延る悪しき病を追い払う時に唱えた神語だとか。

そんなレンネットの手を、机の下でそっと握る。

「はれ？レンネット、顔赤いよ？もう酔っ払ったの？」

「ム！ムギムギムギ！！よ……ちよつと酔つ払ったかも……うん！」

慌てて手を離すが、追いかけるように手を握り返される。

「はられ？ブラニッツも真つ赤らよ？」

「お、お前も真つ赤だからな！！舌回ってないぞ？」

「あらら、ホントおくらあゝむひひひ」

「よく来てくれたブラニッツ、最近順調らしいな？」

「な！！……なにが？」

「？……ギルドだよ、『ケルベロス』だっけ？こちらまで聞こえてくるぞ？」



何動揺してるんだ俺は……

「で、用件って何だ？カーレン」

四英雄の1人、カーレン・ブックスは「ふむ」と息を吐くと、机の中からリストをとりだした。

「何のリストだ？見覚えのある名前もあるな……冒険者か？」

「そうだ、そこに名前の載っている連中は、ここ20日ほどの10日以上戻ってきてない冒険者達だ。」

迷宮に入る前と出た後には、迷宮入り口に立っている見張り番の持っている名簿に、必ず名前を記入しなければならず、10日以上戻ってこない冒険者は統計上、その生存が絶望視されている。

「かなり多いな……」

「ああ、いつもの2倍以上だ、しかし原因はすでに分かっている。」

「なんだ？」

「ここ最近、これと同時に増えている事があと1つある……精神に異常をきたした者の数だ。」

「異常？」

「ああ、マインドブレイク（魔法）の類ではなく、純粹に、恐怖によって異常をきたした者達だ。」

ゾット、背筋に寒いものが走る

「そして、その者達は皆、口をそろえてこう言っただ……鬼がいた……と」

「鬼？」

「赤い瞳が爛々と、闇の奥から見つめてる。」

黄色いツノと黄色い歯、いつの間にやらまっかっか……

ここから離れる奴が来る、笑う声を聞いたなら、急いで逃げろ奴が来る……。」

得も知れぬ気色の悪さに総毛立つ……

「精神に異常をきたした、ある冒険者が歌っていた歌だ・・・その冒険者は自殺したかな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それで？」

「3階層・・・・・・・・皆、3階層で出会ったと言っている。」

「すばらしい情報ありがとう、これでルーアとレンネットを危険から遠ざける事ができる！・・・！」

「ブラニッツ！・・・！」

「断る！・・・！」

「もう、大切な人を・・・・・・・・失いたくないんだ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そうか……」

「クソ……」

「もし、俺が戻らなかったら……絶対に2人を迷宮に入れないでくれ……。」

「ブラニッツ!!」

「約束しろ!!」

「分かった。」

「よし!!……………2人をよろしく頼む。」

### エルザイアの迷宮3階層

魔法がまったく使えない俺は、久しぶりに使う古ぼけたランタンの明かりを頼りに3階層を彷徨う。

おかしい……

モンスターがまったくいない。

2階層までは普通に出てきたモンスターが、3階層に入ったとたん、ぴたりと音沙汰なくなった。

何かが起きている……











あれから10日、ブランニツ・グリーガーは帰ってこない。

「私の責任だ……もっと、ちゃんと部隊編成して送り出すべきだった。」

コン、コココンコン、コンコン……

軽快なリズムで部屋をノックする音に、誰が来たのか検討をつける。

「ロレッツォ殿か？」

「はい、ご名答お~~~~~~~~流石カーレンちゃん!!」

彼の名はロレッツォ・パールナツツ。

飄々としていてノリの軽い男だが、エルベナルとルードルの国境付近にある毒沼の主、ヒュドラを1人でアッサリ倒してしまったほどの実力者である。

「何か御用ですか？」

「仏頂面して、相変わらずつまらない男だよアンタは……」

「お褒めにおあずかり光栄です。」

「ははは！いや、まあいいか……俺、チヨイと野暮用で一時この国出る事になったんだよ」

「それは静かになっていい……」

「そかそか、まあいい。それで真面目な話、最後にアンタの願いを一つだけ叶えてやるうと思ってココに参上したワケなんだよなあ……これがまた」

「ほう……どうゆう風の吹き回しで？」

「これが今生の別れのような気がしてなあ……アンタにはそれなりお世話になったし。」

「フフ……そうか、キミが言っのだからそうなのだろう。」

「おう？気付いてたか……」

「ええ、こつ見えても私、宮廷魔術師ですよ？」

「バカにしてたぜ……で、何にする？」

「私と、これからドラゴン討伐に行く魔術師達に、召喚術を教え  
ていただきたい。」

「あの冒険者を殺してきなさい、私の坊や……」

キヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ……

「うるすうるすう~~~~ぶっ」

「ヒイヒイヒイ……た、たすギヤアアアアアアアアアア……」



わからないわからないい~~~~~キヒヤヒヤヒヤ!!

グシャ!!ポタ~~~~ポタポタ~~~~

「ブ~~~~ブラニツ~~~~ツ」

ぶらにつつ?

なんだろ?きいたことあるかも~~~~

ママ!ママ!!--ぶらにつつてなあ~に?

「フフフ~~~~あなたは知らなくていい事よ~~~~」

なんだそっか~~~~~ならしらなくていいやあ~~~~~

「ホラ、また新しい冒険者よ~~~~食べてしまいなさい、お腹が空いたでしょう?」

うん!!--ぼくおなかぺこぺこ!!--

「ブラニッツ！！」

うん~~~~？まだぶらっつっ？

「ムギ……ねえ、アタシが分からないの？ブラニッツ……

」

キヒ！……キヒヤヒヤヒヤヒヤ！……わからな~~~~いわか  
らな~~~~い！！

「私だ！！ルーアだ！！ブラニッツ！！私分からないのか！？」

る~~~~あ~~~~あ~~~~あ……なんだろ？

「ムギイ……アタシよ……レンネットよブラニッツ！！」

れ？れんねつと？れんねつとれんねつとれんねつとれんねつとれ  
んねつとれんねつと……





ブラニッツ！！」

ゴポポポ・・・ゴポ・・・

「ゴゴがすきー！ーくびくびー！ーいっばいちがでておいしいのー！ー」

「グポ・・・ゲ・・・ゲポ・・・ブ・・・ブラニッツ・・・」

ん？なんでないてるの？

何で・・・

泣いてるんだ・・・？

あの子を・・・守ってあげて・・・あの子、冒険者には・・・  
向いてないの・・・

でも、言っても無駄・・・だと、思うから・・・

何だ何だ？

イタイイタイイタイイタイ！！！頭がイタイ！！

「ムギー！！！！ブラニッツ！！！！何をやってるの！！！！フレインの約束破ってどじするの！！！！」

フ．．．．フレイン．．．．．

さ．．．さわるな！！俺に触るな！！

ブキュブキュ．．．．．ポタポタ．．．．．

俺の腕に腹を貫かれたレンネットが苦しそうに手足をジタバタさせる。

「ムギムギムギギギギ……」

レンネット？

「ト……リカ……トリ……カ……トリカ……  
・トリカ……」

「レ……レンネット？」

「ムギウ……お、おそいぞ……ばかあ……  
「……」

レンネットの目から、コロコロと……涙が転がり落ちる。

「あ……あ……あ……あ……レ、  
レンネット……」

「さ、最後は……ツ……な、名前で呼んで……」

『ファールー族の掟でね、名前を呼んでいいのは自分と一緒にいる人だけなんだよ!!』

『なんだよその掟』

『ムギィ……ブラニッツ!今ばかりでしたでしょ!!ぜったい名前で呼んだらダメなんだから!!』

『お前はいいのかよ……』

『私はいいの!!』

「ペ……ペンテ……」

「へへ……あ、ありがと……ブラニッツ……」

「ペンテ?」





第10話 鬼物語（後編）（後書き）

ごめんなさい、暗い話で……

## 第11話 夜の街

「ばばんばばんばん　あびばびば」

おきまりの歌を歌いながら久しぶりの湯船を楽しむ。

露天風呂なんていつ以来だろうか・・・

夜の帳がおりた夜空と、心もとないランタンの灯火、木の枝から絶え間なく舞い落ちてくる紫色の花弁

その情景があまりに和風で、もといた世界の事を否応なく考えさせられる。

実家の家族は元気にしてるだろうか？心配してないだろうか？家賃や、部屋の私物はどうなったのだろうか・・・もう、帰れないのだろうか・・・そして

「いざ、帰れるとなった時に、俺は・・・」

レステアの事が頭にちらつく・・・

彼女は強く、聡明で気高く、とても美しい・・・なのに、どこか儂げでほおっておけない。

一度ケンカ（一方的暴力）して以来彼女は、感情が昂ぶったり機嫌がよかつたりすると、子供が話すような、少し幼い話し方をするようになった・・・



彼女自身それを恥じているらしく、直そうと心がけている様子が見えるのだが、なぜかその傾向は顕著になってきている。

「まあ、そこが可愛くもあるんだが……」

ザバアアアアアア

身体を拭きながら考える。

帰れるとなった時、もといた世界と、レステアがいるこの世界……どちらを俺は選ぶのだろう。

「クウ………クウ………」

静かな寝息をたてながら、レステアはベッドの上で丸くなっていた。

そういえば、そろそろ寝る時間帯だな……

山奥の洞窟で、焚き火の明かりしかない夜の世界で、できる事は話す位しかなく、日が暮れるとレステアと話ながら、夜の7時〜8時位だろうか？その時間帯には眠りについていた。

シーツをレステアにかけると、そつと部屋から出る。

だがしかし！！ここは山奥ではない……寝るにはまだ早すぎるだろ。

「あら、不思議な色の瞳と髪をしてるわね……どう？私と遊んでいかない？」

「いやあゝ貧乏なもんで……ツケききますか？」

「はあ？貧乏人に用はないよ！」

途端に豹変する娼婦。

我ながら、なかなか上手いこと考えたと褒めてやりたいところだ。

なるだけマナが漏れ出さないよう注意しながら夜の街を歩く。

昼間見かけた、冒険者ギルド横の酒場、あそこなら何か面白い話や情報が聞けるかも知れない。

カランカラン……カラン……

西部劇に出てくるような酒場、見るからにただ者ではない者達、アルコール臭充滿する店内……

見慣れない奴を観察するような視線を浴びながらカウンターに座る。

そして、どうしても言いたくなかったセリフを衝動に負けて口にしてしまう。

「マスター、ミルクをひとつ!」

ギャハハハハハハハハハハ!!ミルクだってよ!!

下品な笑い声が店内を覆いつくす。

やった!!!!思ったとおりの反応だ!!!!こんなコテコテの反応、今時珍しい!!!!とくに日本では……

小銅貨をカウンターに出すと、木製のジョッキに注がれたミルクがドンと目の前におかれる。

「おいおい坊主!!!!ここはお子様の来る場所じゃね〜んだぜ?」

酒臭い息を吐きながら、毛むくじゃらの男が隣の席に座る。

腕の太さ、傷だらけの身体、使い古され、しかし手入れの行き届いたタバルジン（片手戦斧）、なかなかの兵つわものらしい只ならぬ雰囲気つわものを放っているが、レステアに比べればカワイイものだ。

「いいタバルジンですね……まるでドラゴンの爪の様だ。」

武器の良し悪しは分からない、が、この男が大切に使用しているだろう事は分かる。兵が愛用している武器が、悪い武器なワケがない。それに、自分の愛用品を褒められて嬉しくないワケがない……し

かし、ドラゴンの爪は褒めすぎたか？

「おお！！！相棒の素晴らしさが分かるか小僧！！」

小僧って年齢ではないし、素晴らしさも分らないが、多少の人付き合いなら心得ている。

「いや〜ここが戦場じゃなくてよかったよ、じゃなきゃ逃げ出してたところだ。」

「ブハハハハハ！！気に入ったぞ小僧！！おい、こんなシケたモンじゃなく、男の飲み物を俺様が特別にご馳走してやるぜ！！マスター！！ボム酒だ！！ガハハハハハ！！」

日本社会で鍛えたよいしょスキルが、こんなトコで役に立つとは・  
・  
・

「ほら、あそこで酒を飲んでいる女2人組み、あの2人が殺されたと言われているブラニッツのパーティメンバーだった2人だ、あのチビっこのいのも四英雄の1人で、かなりの腕前らしいぞ。」

毛むくじやらの男は、見かけによらず気のいいヤツで、最近起こった出来事を色々と話してくれた。

「あ、ホグルードの塩漬け肉2人前追加で！ガルドさん、お酒追加します？はい、ボム酒1つ追加で・・・あと果実酒。」

「なんか悪いな光秀、逆にご馳走してもらっちゃまって！」

「いえいえ、それだけの価値がありますから“ガルドさんの”話には」

「ガハハハハ！そうかそうか！！ガハハハハ！！」

嘘ではない、情報は時に金以上の価値を持つ、命に関わる情報ならなおさらだ。

「で、その鬼とやらを見たって人は？」

「ああ、みんな病院行きさ・・・と言っても、そんなにいないがな、鬼の姿を見て帰って来た奴は。」

結構な実力者も犠牲になってるからな、みんな鬼にブルっちまって迷宮に入りすらしない、入っても2階層まで、俺は最近3階層まで行ったがスグに引き返しちまったよ・・・入ったとたん肌で感じた・・・あそこはヤバイ。」

そう言つと、ガルドは酒を煽る。

「光秀、お前は行くなよ？俺はお前の事を気に入つた！！気に入つた奴が死ぬのは辛いからなあ」

カランカラン・・・カラン・・・

と、酒場に誰か入って来た。

しんと静まる店内。

まるで、息をするのさえ躊躇われるような緊迫感……渦巻く強大なマナ……

「光秀……」

静かな、しかし底冷えするほどの怒気が籠もった声……

誰も動けない、動いたら……殺される……。

「主人を置き去りにして酒盛りとは、随分と偉くなったものだな……光秀。」

「その酒代はどこから出てると思っている？私の身体（鱗、甲殻）を売った金であるっ？その金で酒盛りとはのおっ」

ガシャン！！

首根っこを掴まれると椅子から引きずり落とされる。

「一度、徹底的に躡なければならんのおっ」光秀。

ズル……ズルズル……

「た、たす……」

カランカラン……カラン……

「何者だあの娘？」

「ありや人間じゃないな……神や悪魔の類だ。」

「あのミルクボーイ……死んだな。」

「しかし、あの男もヒドイ奴だな……自業自得。」

「マスター、光秀の……吊いの酒をくれ……」

「光秀！！背中ばかりじゃなく、ちゃんと前の方も洗え！！」

光秀のヤツめ！！わらわを置き去りにおって！！

クソ、狼狽してしまった自分が恥ずかしい……

「いえしかしお嬢様、そのような……」

「なんじゃ？わらわに刃向かうのか？」

「いえ、決してそのような……」

あたり前じゃ！！余計なこととは考えず、わらわに言われたまま動いてればよいのだ！！

「早くしろ！！」

「でわ……」

「………んっ……」

「お、お嬢様！？」

「な、なんじゃ！素っ頓狂な声をあげおつてからに！！」

「もう綺麗になったと思います……よ？」

「ひとなでただけであろう！！ほら、黙って手を動かせ……」

「はい……」

「………っ………っ………くっ………も



「……………はい」

「ん？光秀も洗ってほしいのか？」

「そんな！！わたくしめは先程自分で洗いましたので！！」

なんじゃ、つまらんヤツじゃ……

紫色の花弁に彩られた湯に浸かる。

妙に緊張した光秀は、わらわに背を向けて「俺はロリコンではない！！」と、頭の中で唱えている……………ロリコンとは何であるうか……………

「光秀……………」

「はひっ！！」

「もといた世界に帰りたいか？」

「……………帰りたい……………かな。」

何やら迷っているようだが、よく分からない……最近、光秀の心が読み辛くなっている。

わらわの与えたマナが、光秀のマナとして、わらわのマナとは少しずつ変化しているのが大きな要因であろう。

「この世界は……好きか？」

わらわは何を光秀から聞きたいのであろうか……自分で分からない。

「正直分からない……俺はまだ、この世界の事をあまり知らないから。」

「わらわの……」

「ん？」

「……なんでもない、あがるぞ。」

ザバァー————

寝る気満々で着替えをしている光秀に、少し腹が立つ。

「光秀、おぬしはここで一晩中立っておれ!!」

「え?マジで?」

「マジじゃ……1人で出かけた罰じゃ!!」

「はい、お嬢様……」

「うむ、ではおやすみ」

「……おやすみ」

……

……

……

「光秀・・・・・・・・・・もうよい。」

「は？」

「わらわは慈悲深いのじゃ、わらわの横で寝る事を許そう・・・」

「はあ・・・・・・・・」

「それに今日はまだ、話を聞いておらん・・・」

光秀が、ごそごそと横に入ってくる。

「では・・・・・・・・・・今日は、『シュレインガーの猫』という話をしよう。」

光秀の口から紡がれる異世界の話はどれも興味深く、知的好奇心を刺激される。

「その猫ははたして生きているのか・・・・・・・・・・それとも死んでいるのか・・・・・・・・」



## 第11話 夜の街（後書き）

本格的な迷宮探索は次の話からです。

すみません！…この話、さっきまで中途半端な状態で投稿されていたみたいなんです！！

ほんとすみません…；；

## 第12話 迷宮へ（前書き）

お願いとお詫び

11話ですが、制作の途中で保存しようとして予約掲載にしたら、日にちが間違っていたらしく、中途半端の状態です。3時間ほど掲載していましたが、すでに完成したのですが、中途半端の状態です。読んでいます。場合もありますので、4月12日の19時頃〜23時頃までに読んでしまった方は、もう一度確認の方よろしくお願ひします。

このような不手際、大変申し訳御座いませんでした。

## 第12話 迷宮へ

兵舎で迷宮探索の準備をしていると、煌びやかな鎧を纏った貴族風の騎士が入って来た。

「私の名前はペヴァー・ルシュレイ、お初にお目にかかるロレッツオ殿!!!」

そして恭しくお辞儀をしながら名乗られたその名前に、俺は覚えがあった。

コイツが!?

有り得ねえよマジで!!

英雄ペヴァーがコイツ?

有り得ねえよマジで!!

まあ見た感じ、それなりに強いかもしれないような気がしないでもねえ。

しかし、それはあくまで“人間”としての範囲内であって『ケベレスの邪竜』や『エルザイアの鬼』その他様々なモンスターを倒した英雄の中の英雄ペヴァー……には、どう鼻屑目に見ても見えねえ。

外見じゃない、マナの保有量の問題だ。



俺は自分のマナで相手のマナに触れるだけで、そいつの情報を読み取る事ができる能力を持っている。

この能力は、たとえ神や魔王であろうと決して真似することのできない、完全な固有能力だ。

と、言いつつ、この世界にはあと1人使えるヤツがいるハズなんだが……ソイツは今、アーテスタ山脈の氷の中でお眠り中のハズだ。

まあそれはいいとしてだ、その能力でペヴァー・ルシュレイを読み取ったところ……カスだ。

マナ保有量は、宮廷魔術師カーレン・ブックスの10分の1にも満たない……そのカーレンを倒したエルザイアの鬼や、ましてやドラゴンなんかに、こんなクズが勝てるワケがねえ！！

つまりコイツは……張子の虎……

と、ここでペヴァーが背にしてるドアが開き、見覚えのあるヤツが入って来た。

「ご機嫌いかがかな？ロレッツオ殿……今日鬼退治に出かけると聞きましたな。」

狸大臣ガーヴァツソ・ムニエル……

「ああ、その予定だが……何か用でもあるのか？」

「はい、できればいいのですが、社会勉強にと思いましたが……私の部下である、このペヴァーを鬼退治にご同行させてはもらえないだろうか。」

ペヴァーがこの狸の部下って事は、この狸がペヴァーの英雄伝説に何か関係あると見て間違いねえくだろ。

何か仕掛けてくるつもりか……暗殺？この張子に俺が殺せると？それとも手柄の横取りか？

どっちも決定打不足だな……だが

「ああ〜いいぜえ〜英雄誕生のその瞬間を拝ませてやんぜえ〜ペヴァーさんよ。」

これで狸の尻尾が掴めて、お人形ちゃんにも近づける……かも知れん。

脅しがきいた、まさかこんなに早く食いつくとはなあ〜

ククク……これでまた一步、野望実現に近付いたってこつた。

「そんなじゃあ〜行きますかペヴァーさんよ……鬼退治へ」

「悪いが、証を持ってない者を通すワケにはいかん！」

『エルザイアの迷宮』手前で見張りをしているらしい兵士2人組に止められた。

どうやら冒険者としての証が通行証になっているらしく、ギルドでの登録を面倒だと言いついていなかったレステアが入る事を止められた。

「なんだ、1人持つてればいいだろう？」

レステアは不機嫌そうに兵士2人を睨みつけながら言う。

「い、いや……そう言うワケにもい……いかなのだ……」

殺気による脅しにも屈せず気丈に任務を遂行する兵士さんに敬礼をしたい、俺なら入れてるよ……

「そうか……なら死ね」

瞬時に俺は兵士の腰あたりにタックルを決める

兵士が倒れた事により、レステアの手先より伸びた氷の刃は空を斬った

レステアの手に集まる異常な冷気に気付くのが遅れていたら・・・

「何をしている光秀・・・」

「ちょー！！俺のセリフだからソレ！！何も殺す事ないと思いますよレステアさん！！」

「甘いな光秀は・・・敵対されたのだぞ？面倒な事になる前に処分した方がいい。」

「ヒ・・・ヒイイイイイ！！」

1人は押し倒した事により昏倒したが、もう1人は逃げ出した。

「チツ・・・」

「俺が行くからッ！！ここにいて！！殺すなよ!？」

「ほら、逃げて行くぞ」

フルメールで森の中を逃げ惑う兵士の足は遅く、あっという間に追いつき背中にタックルをお見舞いすると、兵士はそのまま眠ってくれた。

「光秀、こんな甘いことしてると死ぬぞ？」

「わかってる。でも、コイツらは別に俺達を殺すつもりじゃなかったから・・・」

殺すつもりできている奴等なら、殺す事も仕方ないと思える。

それは相手も覚悟している事だろうし、だが、さすがに見張りをしているだけの兵士を殺すのは・・・

「光秀、ここはお前のいた世界とは違う・・・そこは理解しているな？」

「ああ、その時がきたら殺さないといけないという事も分かっている。」

「・・・そうか、ならいい・・・行くぞ。」

でも、分かってはいても、躊躇せずに兵士を殺そうとしたレステアに強烈な違和感を感じた。

まるで虫でも潰すかのようだった・・・

「予想以上に多いな・・・ここからは止まらずに蹴散らしていく、邪魔はするなよ。」

一寸先も見えない迷宮を真っ直ぐ見据えるとレステアは両手から氷の刃を出した。

「分かった。」

「はぐれるな、付いて来い。」

そう言うと、突然走り出したレステアの後ろを慌てて追従する。

速い……しかもよくこんな暗闇を走れるものだ。

「ギヤアアアアアアアアアア！」 「ギョエエエエエエエエエエエエ  
！！」

前の方から次々に断末魔があがる、どうやらレステアと“何か”が戦っているらしい。

戦闘によりスピードの落ちたレステアに追いつくと、そこは血の海になっていた。

「光秀！！1匹抜けたぞ！！」

つまり……ヤレと……。

前から人間の半分ほどの大きさの小鬼のようなヤツが駆け抜けてきた、手には折れた剣が握られている。

醜悪な面と言えど二足歩行の生物、初めての戦闘……クソ！！

“ソレ”は見かけからは想像できないほどの跳躍を見せ、俺の頭めがけて剣を振り下ろす

が、遅い！！レステアの剣戟からするとスローモーションにすら見

える

剣を振り上げ、無防備となった小鬼のワキ下から斬り上げる  
嫌な感触が剣から手に伝わる

空中を舞う胴体から斬り離された小鬼の頭と腕  
剣を汚す血

俺が………殺つたのだ。

「光秀ツ!!! 2匹行つたぞ!!!」

レステアがそんなに敵を逃すワケがない………つまり。

考える間もなく2匹の小鬼がやってくる

重心を落とし、足と腕を意識する

「ギ!!!」

松明の有効範囲内に入ったと同時に下から斬り上げ1匹を殺すと、  
次に現れた小鬼に剣を振り下ろす

さらにもう1匹、レステアの声が聞こえなかったので反応が遅れた  
が、攻撃を難なくかわし背中に剣を叩き込む

「まあまあ、ギリギリ及第点つてところか……」

暗闇からレステアが出てきた。

「やっぱりわざとだったか……」

「又ルイ事言ってたからな。」

「悪いな、気を使わせて」

「気などつかっておらん……それにしてもゴブリンが多いな。」

「そう言えば、最近あまり冒険者が入らないからモンスターが増えてるって言ってたな。」

「昨晚一緒に飲んだ……名前忘れてしまった。」

ゴブリンを蹴散らしながらしばらく行くと、地下へと伸びる階段が見つかった。

下からゴーーーーー、ゴーーーーーと規則的に吹き上がって来る風が、まるで息をしているように感じられた。

「光秀、ここからは迷宮自体が生きているかのように形を変える。私から離れるなよ。」

「分かった、じゃあ走らないのか？」



「そうだな、時間は掛かるが歩いていこう。」

「了解」

2階層は1階層とさほど変化にない石レンガ造りだった。

これでどう迷宮が形を変えるのか、実に興味がある。

ゴゴゴゴゴゴ……

と、壁と地面が動き出す。

「おっとっと……これは凄いな、まるで軟体動物の……  
レステア？」

「光秀ッ！！どこだ！！どこに行った！！」

油断していた、わらわとした事が、まさか目の前で見失うとは……

「光秀ッ!!」

「ムギツ!?! 迷宮に小さな女の子がいるなんて……」

目の前から2人組みの冒険者が出てきた。

「なんじゃ、わらわに用か?」

面倒だな……殺しておくか?

「まさか鬼!?!」

大きな弓を持った女が訝しげにこちらを伺っている。

「ムギユ!! ルーアちゃんと話聞いてた? 鬼は黄色の角が生えてるって言ってたでしょ?」

小さい方はファールー族の雌か……それなりのマナを宿しているな。

「仲間とはぐれたのだ、間抜け面をした黒髪の間族なのだが見かけなかったか?」

「あーあれじゃないレンネット、さっきの男2人組!!」

「ム〱黒髪って言ってたでしょ? 人間族の黒髪なんてめずらしいわね、見てないわ。」

「そうか、見かけたら私の事はいいから外に出ておけと言ってお

いてくれ。」

「アナタ一人で大丈夫なの？アタシ達と一緒に探そうか？」

「レンネット！早くブラニッツ見つけなきゃいけないのに！！」

「ムギイ！！でも、こんな小さな女の子放っておけないでしょ？」

そうだな、できるだけ無駄なマナは使いたくないし、ここは着いて行くのも手だ。

「そうしてもらおうと都合がいい、一緒に探せ。」

第12話 迷宮へ（後書き）

すみません、アップ遅れたお・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5312r/>

---

MONSTER S ~ モンスターズ ~

2011年4月15日22時51分発行